
召喚された後の神の代行者と異世界の少年(習作)

フレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚された後の神の代行者と異世界の少年（習作）

【Nコード】

N3237V

【作者名】

フレイ

【あらすじ】

トリステインの大貴族の娘に召喚された謎の美青年と異世界の少年。

召喚された彼らはハルケギニアでどのような展開を見せるのだろうか。

青白い瞳と髪中国青年は己の行くべき目標を見つけられるのだろうか？異世界の少年は元の世界に戻るのだろうか？それは誰にも分か

らない。

※この作品は前作『神の代行者の戦いと5000年前の歴史』とは殆んど繋がりがありません。

予定としては原作に沿っていくつもりです。

筆者の練習の為の作品ですので、それをご承知の上でご覧下さい。

利用規約改訂により、原作の部分を引用しています。

プロローグ（前書き）

全体的に修正する為、一度削除しました。

短いですが、プロローグから始めます。

プロローグ

東京のとある街を一人の少年が歩いている。

ノートパソコンを手に持ち、帰宅の途中なのだろう。

彼のご機嫌のようだ。

パソコンが壊れ、修理を終えたのだ。

出会い系サイトに登録し、これで彼女を作ろうとしているのだ。

だが、少年が登録したサイトはまともなサイトではないようだ。

現在は法律の規制により、出会い系に未成年が登録を禁じられており、この少年はどう見ても未成年である。

高校生のようだが：

登録したサイトは毎月数万円を支払う事になっており、少年にそんな金額を支払える筈がなく、支払いの名義は親の名前を勝手に使って登録したのだ。

だが、少年は知らない。

彼のこの行動が後々、取り返しのない程の災いを引き起こす事を：

途中、少年の目の前に、光る鏡が突然出現した。

立ち止まり、それをジロジロと見て、決めた。

宙に浮いた光る鏡を潜ってみようと決めたのだ。

好奇心がとても強いようだ。

しかも後先を考えもせずに、躊躇いなく……潜ってしまった。

身体中に何故か知らない強い衝撃に襲われ、意識を失ったのである。

目を覚ましたら、知らない場所に自分が居て、目前にピンクブロンズの髪の少女が居たのである。

とある浜辺に一人の少年が佇んでいた。

ずっと海を青白い瞳で眺めており、何か考え事をしているようだ。

「この海の先にハルケギニアが……さて、そろそろ行くとするか」

『そうね、アル。』

今の貴方なら何があっても、大丈夫よ。

さあ旅立ちなさい、アルのやるべき事を見つける旅に！』

少年を『アル』と呼んだ女性は彼の母親のようだが、どうも彼女の容姿に何かが引っ掛かる。

まるで、幽霊のような…

「ああ、オレには母さんから貰った『神の心』があるからな。行こう、自分との戦いに！」

『神の心』とは一体、何の事だろうか。

アルは海に潜っていった。

海中に潜ってどれくらいの時間が経ったのだろうか。

彼は魚のように息継ぎをせずに、スイスイとハルケギニアに向けて、泳いでいると、アルの目の前に楕円形の光る鏡がいきなり出現した。

（何だこれは？……誰かが呼んでいるような気がするが……）

光る鏡を出してきた誰かが自分を招いているような気がした。

（面白い、何処の誰だか知らないが、いいだろう。
その『指名』を受けてやろう）

ニヤリと笑い、海中に浮く鏡を潜ったのである。

鏡を潜ったら、いきなり、宇宙らしき空間に飛ばされた。

此処は何処だろうと周りを見渡すと、自分はその空間に浮いており、
無数の星が見えた。

どうやら宇宙のようだが、どうしてこんな所に…

（宇宙に飛ばされたようだが…深く考えても仕方ない。
前に進むだけだ）

何処だろうと関係なく、進み始めた。

因みに宇宙で生身では危険な筈なのに、アルは平気で出口を求めて、
宇宙を泳ぐように進み始めた。

宇宙に飛ばされて、9年の時が流れた。

少年だった彼は青年となって成長した。

出口を求めて、宇宙を彷徨い、様々な経験を積んだ。

星屑に襲われたり、ブラックホールに吸い込まれたりしたが、それでも生き残った。

星屑はともかく、ブラックホールに吸い込まれたりしたら普通、それで終わりであるのだが、アルはかなりの時間をかけて脱出したのだ。

人間がブラックホールから脱出するなどどう考えてもあり得ないのだが、アルはそれをやり遂げたのだ。

彼には謎が多い。

一体何者だろうか…

（ん？あれは……）

アルは見覚えのある物体を発見し、確認の為、接近すると、それは昔、海中で潜った楕円形の光る鏡だった。

（あの時の奴だな。

次は何処に飛ばしてくれるんだろうな）

そう思い、アルは再び鏡の中を潜ったのである。

そして、潜った先には学校らしき立派な校舎が立っており、そこにこの学校の制服を着たピンクブロンドの少女と、普通の少年が居たのである。

プロローグ（後書き）

アルの目の前の少女は何者だろうか？この世界の人間じゃなさそう
な格好をした少年は？

ルイズとサイトとの出会い、そして三人の共同生活の始まり（前書き）

初めて指摘を受けたので修正しました。

ルイズとサイトとの出会い、そして三人の共同生活の始まり

「アンタ達誰？」

ピンクブロンドの少女がアルと少年をマジマジと見つめる。

少年は仰向けになって寝転がっているが、アルは普通に立っている。

アルは少女の言葉をスルーして、周りを見渡す。

どうやら元の世界にアルにとって戻れたみたいだ。

此処は何処なのかは知らないが、結果的に戻れた事には変わりはないのでそれはそれで良しとした。

そして周辺の人間の格好と建物の感じからして、此処がハルケギニアだと判明した。

（やっと戻れたか。

此処が何処なのかは知らないが、そんな事はどうでもいい。
今から旅立つとするか）

宇宙からハルケギニアに帰還出来たので、アルはこれからハルケギニアを巡る旅を始めようと歩きだした。

「ちょっと待ちなさいよ！」

後ろから声が聞こえたが、それを無視して、校門らしき所に向かい、この場を去ろうとしているが、声をかけた少女が慌てるようにアル

の前に走って回り込んだ。

「待ちなさいって言うてるでしょ！聞こえないの！？」

聞こえてはいるが、少女など眼中にないアルは、無視されて怒り心頭の少女の横をスッと通り過ぎた。

少女を含む周りの連中に背を向け、校門に差し掛かろうとすると、少女の次に、一人の中年男性がアルを呼び止めた。

「君、ちょっと待ってくれないか。

何処に行こうとしているか知らないが、私の話を聞いて欲しい。

先程の場所に戻って君と話し合いをしたいのだが、お願い出来るかな？」

「……………」

アルは中年男性の丁寧な頼みに無言で応じる事にして、彼と先程居た場所に戻っていった。

戻ってみると、少女と少年が何か揉めているような感じで言い争いをしており、周辺の生徒らしき少年少女達はそんな二人を見てバカにするかのように笑っている。

こんな光景に興味がないアルは中年男性と今の状況について話し合いをしようとする、少女が男性に向かって、怒鳴り付けるように

叫んだ。

「ミスタ・コルベール！」

コルベールと呼ばれた男性は少女に振り向く。

「何だね？ミス・ヴァリエール。

少し待ちなさい、今からこの彼と話をしなければならぬからね」

コルベールはヴァリエールと呼ばれた少女にアルとの話し合いが終わるまで待つように言った。

「でもミスタ・コルベール！私よりこんな平民なんかに何の話を…」

「いいから待ちなさい！とにかく今は黙って私の言う事を聞きなさい！」

「！……………」

コルベールは言い掛ける少女に一喝すると、周辺の連中に教室に戻らせ、アルと彼と同時に召喚されたらしい少年とヴァリエールを残した。

「話を戻そう、まずは私の名はコルベール。
ジャン・コルベールだ。

このトリステイン魔法学院の教師をしている者だ。
よかったら、君の名前を覚えてくれないかな」

「『アルシオン』です。
ただの旅の者です」

アルはフルネームを明かした。

母親に『アル』と呼ばれたのは愛称のようだ。

互いに自己紹介するとコルベールはアルシオンにトリステイン魔法学院と先程の行事についての説明をした。

アルシオンは学院の事と先程、彼らが伝統による行事である『使い魔召喚の儀』を行っていた事をコルベールから聞かされた。

そして、その儀式にアルシオンとそこに居る少年がこのヴァリエールに召喚された事も聞かされたのだ。

アルシオンもコルベールに自分の事を話した。

もちろん、知られてはならない事は全て伏して、その部分は誤魔化した。

「話は分かりました。

つまり、オレと彼はこの『お嬢ちゃん』の奴隷となれと仰るんですね?」

「ちょっと、平民!この私に向かって何て口を…」

ヴァリエールがアルシオンの言葉にカチンときて、文句を言おうと

したら、コルベールに抑えられた。

「奴隷とはいい言葉ではないが……君達にこのミス・ヴァリエールの『使い魔』になってもraitたいんだ。」

「使い魔も奴隷とそう大差ありませんよ。
もし、オレが断ると言えばどうしますか？」

「嫌かね？」

「聞くまでもないでしょう。」

それにオレを使い魔にしようとするなら、止めたほうがいいですよ」

「どうしてだね？」

「言葉通りです」

そして、アルシオンは話を切り上げ、終わらせた。

「……ならミス・ヴァリエール、この二人、もしくは誰か一人を選んで契約したまえ」

ヴァリエールに使い魔契約するよう命じると、彼女はコルベールに召喚のやり直しを要求するが、それを却下され、それでも掛け合ったが、コルベールに論破され、結局、渋々と従う事にした。

二人一緒か、誰か一人選んで契約してもいいと言われ、ヴァリエールはアルシオンと少年を品定めするかのように見つめ、考える。

（二人一緒でもいいけど……それじゃ食い扶持が増えるから却下ね）

そう考えながら、再びジロジロと見つめると今まで蚊帳の外だった少年が叫ぶ。

「待てよ！さっきから黙って聞いてりゃ、奴隷だの、使い魔だの！何なんだよアンタらは！？」

ギャーギャー喚くように文句を言うと、ヴァリエールも喧嘩腰で言い返し、コルベールが疲れた表情で何とかケンカを止めさせた。

アルシオンはこんな二人に下らないモノ見るような目を向け、ため息をついた。

「コルベールさん、オレ達…いや、オレに選択の余地はないと？」

「申し訳ないが…これを運命だと思って受け入れてくれ」

「……………」

そんなコルベールの言葉に残念な表情を見せた。

「そうですか、後で、どうなっても知りませんよ」

「?……君は何を言ってるんだ？」

コルベールを無視し、背を向けた。

少年と揉めたヴァリエールは再び誰を使い魔にするか二人を見つめた。

（コイツはダメね、さっき私にあんな口答えしたし、冴えないし、役に立ちそうにないし、ならは……）

ヴァリエールはアルシオンを選ぶ事にした。

「ねえアンタ」

「何だ？」

「感謝しなさいよ、使い魔としてアンタを選んであげるんだから……」

「お前はバカか？誰がお前の使い魔なんかになると？誰が感謝するんだ？寝言は寝て言うんだな」

「な、何ですって!？」

ヴァリエールの使い魔になる事を拒否した。

「アンタね、この私を選んであげるといつてんのよ!こんなのより、アンタの方がマシと思って選んであげるんだから、光栄に思いなさいよ!」

「……そうか、なら『覚悟』は出来てるんだろうな？」

「覚悟ですって?あに言ってるのよ!平民相手にそんな必要がないでしょ!使い魔契約するだけなんだからそんな必要もないわよ」

アルシオンの言う『覚悟』とは何なのだろうか？

そんな彼の言葉を理解出来ない彼女は目をつむり、小さな杖を一振りした。

「わが名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

何か呪文を唱え始め、アルシオンに近づいた。

「屈みなさいよ…」

「ん？何故だ？」

「アンタ大きいから届かないのよ！さっさと言う通りにしなさい！」

「愚かな子供だ…」

膝を曲げて、ヴァリエールの背丈まで屈み、そして、アルシオンの唇にキスをした。

「終わりました、ミスタ・コルベール」

顔を真っ赤にして、使い魔契約の終わりをコルベールに告げた。

「ウム、『サモン・サーヴァンド』は何度も失敗したが、『コントラクト・サーヴァンド』は成功したようだね」

コルベールは嬉しそうにヴァリエールの契約の成功を喜んだ……………

……………だが、何時まで経っても、アルシオンに変わった様子がなく、ただ静かに時が流れている。

「あー、君。

自分の身体に何か変わった事は…」

静寂に堪り兼ねたコルベールが口を開いた。

「別にないですよ。

この通り、至って普通です」

あっさりと答えたが、ヴァリエールは納得していないのか、怒鳴るように尋ねる。

「アンタ、『コントラクト・サーヴァンド』受けて何ともないの！？」

「当然だ、別に『オレ自身』はどうもない」

「ウソ……………」

どうやら失敗したらしいが、コルベールはアルシオンがダメなら、この少年にしたらどうかと促すと、彼女はそれは嫌だと言って断り、再び使い魔契約の呪文を唱え、「もう一度やるわよ！」とアルシオ

ンに屈ませ、キスをした。

だが、何度も何度もキスをしたが、それでもアルシオンに使い魔契約による変化が見られなかった。

どれだけ接吻を交わしたのだろうか：ヴァリエールはウツトリした表情で地面に尻餅ついた形で座り込んでいる。

恍惚な瞳で、口から涎を垂らし、「ハア…ハア…」と悩ましい息切れをしている。

契約の失敗により、何度もキスを重ねる内に徐々に彼女が無意識にその気になったのか、自分からアルシオンの首に手を回して、キスをしてきたのだ。

最初はお互いの唇をくつつけるだけだったが、徐々に、ヴァリエールからアルシオンの口に舌を入れるようになり、濃厚なモノに変わっていった。

更に、アルシオンはそれに応えるかのように、自分の舌で彼女の舌を絡め、激しいキスを繰り返した。

大胆な事に、ヴァリエールはアルシオンにしがみつき、両足で彼の腰をカニ挟みして、彼女が貴族とは思えない程、下品（性的な意味）かつ激しく濃厚なラブシーン（キスのみ）をこの光景に呆然としているコルベールと少年に見せ、今に至るのだった。

「ねえ……」

「ん？」

彼の舌技にメロメロになり、契約前の彼女とは思えない口調のヴァリエールがアルシオンに懇願するような目を向けた。

「立たせて…力が抜けて…立てないの、お願い…」

さっきの高慢ちきな態度は何処に行ったのか、可愛く、甘えた声を出して、アルシオンにお願いすると、彼はヴァリエールの腕を掴み、立ち上がらせると、彼女は「エヘッ♪」とイタズラっぽい笑顔で可愛く、ペロツと舌を出して、抱きついた。

そして…

「もうキスだけじゃイヤ……そろそろ欲しくなったから挿れ…」

「まままま待ちなさーい！！！！」

ヴァリエールが凄い言葉を漏らす前に、この光景にさっきまで呆然

としていたコルベールが我に返り、彼女の言葉の続きを叫ぶようにして止めた。

「ミスタ・コルベール、まだ居たんですか？」

邪魔されて、少し不機嫌な表情になった。

「ミス！き、き、君は一体ナニをしてるんだね！！？君は使い魔契約と言う神聖な儀式をしてるんですぞ！！それを途中でな、何てふしだらな事を！！！！」

コルベールはアルシオンと淫らな行為（？）をしたヴァリエールを怒鳴り始めた。

もはや、ルイズの中ではアルシオンとの熱いキスにより、「使い魔契約？なにそれ？おいしいの？」みたいな気持ちになり、どうでもよくなってしまうたようだ。

しかも、彼女は数えきれない程のキスを交わす内にアルシオンに惚れてしまったようだ。

「それでだね……って聞いてますか！？ミス！」

「聞いてますわ、ミスタ・コルベール」

説教されているが、ヴァリエールはジーツと愛しいアルシオンをウツトリした目で見つめ、コルベールの言葉など右から左へと聞き流

していた。

しかもアルシオンの腕を絡めながら：

「では続きを再開しよう、ミス、彼との『コントラクト・サーヴァンド』は失敗したから、今度はこの少年としたまえ」

存在を忘れられた少年に指を差すと笑顔で「イヤです♪」と言って断った。

「…いい加減にしたまえ、ミス。

君は契約を完了しないと二年生に進級出来ないんだぞ、それでもいいのか？」

「別に構いませんわ♪」

とんだ問題発言にコルベールは驚愕し、色惚けした彼女に考え直してもらおうと、全力で説得に入った。

コルベールの必死の説得にヴァリエールは聞く耳を持たず、彼の言葉にNOで拒否するが、それでも諦めずに説得するが、状況は同じ事の繰り返しで、全く変わらなかった。

アルシオンはこのままでは終わらないし、一生懸命ヴァリエールを説得しているコルベールを哀れに思い、助け船を出す事にした。

「ヴァリエール」

「何？ねえ、私の事はルイズって呼んで♪」

「ならルイズ、コルベールさんの言う通りにしろ」

「えっ！？……私、したくないんだけど……」

本当に嫌な顔をしたので、彼はヤレヤレと肩を竦めた。

「仕方ない奴だな、言う通りにしたら『ご褒美』をやる。

だからオレの言う通りにしろ」

ルイズに『ご褒美』と言うエサをちらつかせると、その言葉に乗ってきた。

「うん、分かったわ！じゃ、するね！」

ルイズは嬉しそうに、石ころのように存在を忘れられた少年に駆け寄り、呪文を詠唱し、少年に思い切り「ブチュ〜！」とキスをして、ルイズの行為に唾然とした少年に背を向け、アルシオンの胸に飛び込んだ。

現在のルイズはもう今までのルイズではないようだ。

「キスされた……女の子からキスされた……」

ブツブツと少年が呟くと、突然、少年の身体が熱くなり、悲鳴を上げた。

アルシオンはルイズから離れ、何かに苦しむ少年を助けようと駆け寄ったが、一瞬の出来事だったのか、少年の身体を苦しめた熱は直ぐに治まったようだ。

「大丈夫か？」

「あ、ああ…身体中がいきなり熱くなって…でも直ぐにそれが治まったよ…」

「そうか、ん？これは…」

少年の左手の甲に何やら文字がついていた。

「これは珍しいルーンだね」

コルベールも少年の左手の甲を見て呟いた。

「お、おい！お前、オレの身体に何しやがった！？」

少年はルイズに抗議する。

「アンタの身体に使い魔のルーンを刻んだのよ…本当はこんな事しなくなかったけど…仕方なくしたわ…ゴメンなさい…」

ルイズは謝ったが、少年はそれに納得出来ず、再び抗議した。

「使い魔だって？何なんだよそりゃ！？ふざけるな！！」

キレて、ルイズに飛び掛かろうとするが、アルシオンに制止された。

「オレも君に謝る。

済まない、まさかこうなるとは思いませんでした。

ルイズがした事はオレが全て責任を持って君の面倒を見るから、どうか許してやってくれないか」

怒りで興奮している少年を宥め、アルシオンの説得により、彼は冷静になってくれた。

少年は取り敢えず、この状況を受け入れる事にした。

少年はアルシオンの説得で自分を使い魔にしたルイズが人間として普通に接するならと言う条件で許した。

当然ルイズも少年の条件を受け入れ、表面上は使い魔として、それ以外は人間として扱う事にした。

ちょっと前のルイズならそんな条件、しかも平民の条件を絶対に受け入れないのだが、アルシオンにより、色んな面で丸くなったようだ。

今までのルイズは貴族としての高いプライドを持ち、伝統と格式を重んじていた。

だがそれらは両親の教育と魔法が使えないと言うコンプレックスによって無意識にルイズの本当の心を苦しめ、縛られ、高慢で、平民を見下す性格を生み出してしまった。

そして今日、ルイズはアルシオンによってその呪縛が解かれたのだ。

彼女の真の姿である心の優しいルイズが解放されたのだ。

「ではミス・ヴァリエール、君は契約を完了したから、二年生に進級を認めよう。
おめでとう」

コルベールはルイズの二年生進級を認めると、その場で解散となった。

「改めて紹介しよう、オレはアルシオンだ、アルと呼んでくれ。
宜しくな」

「もう知ってるでしょうけど、私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。
ルイズって呼んでね」

二人が自己紹介すると、少年もお返しに自己紹介する。

「オレは平賀才人。
サイトって呼んでくれ、アルさん、ルイズ」

サイトはどう見ても年上であろうアルシオンをアルさんと呼び、年下らしいルイズをそのままで呼んだ。

これから三人での生活が始まろうとしている。

ルイズとサイトとの出会い、そして三人の共同生活の始まり（後書き）

未だに誤字脱字があると思いますので遠慮なく指摘して下さい。

三人の絆（前書き）

執筆する時間が欲しいです。

今回は三ページしか出来なかった…

三人の絆

ルイズの部屋にて、この部屋の主であるルイズ、その彼女の本当の姿を曝け出したアルシオン、最後はルイズの使い魔になったサイトが居る。

アルシオンは二人に自分の生い立ちなど別に知られても構わない事を話した。

ルイズはアルシオンの話を真剣に聞きつつ、赤面になりながら、彼にピタッと寄り添ってきた。

素直で優しい本来の彼女を、貴族としての無駄に高いプライドと高慢さ、そして魔法が使えない事によるコンプレックスと言う『鎖』で縛られ、無意識にそんな偽りの自分を今日まで演じたのだ。

だが、自分を縛り付け、苦しめた『鎖』を断ち切り、本当の自分を解放してくれたアルシオンに惚れてしまったのだ。

「……と言う訳だ」

アルシオンの話が終わると、今度はサイトが自分の話をした。

「そうか、サイトの世界に魔法が存在しないのか」

「でも、信じられないわ……」

「そりゃオレだって信じられないよ、魔法の国に来ちまうなんてさ。夢じゃないかと思ったよ……」

「どうやらサイトのその様子じゃ、話は本当のようだな」

「アル、そう？ 私は未だに信じられないけど」

「オレには分かる、サイトの言葉と目に嘘がない。
オレは信じるよ」

「アルさん、信じてくれるんですか？」

「ああ、オレは君を信じるよ」

「……ありがとうございます！」

サイトは嬉しかった。

自分を信じてくれる人間が居た事が嬉しかったのだ。

この世界の人間はきっと自分が別の世界から来たと言っても信じてくれないだろうし、それだけでなく、バカにするだろう。

「ア、アルがサイトを信じるなら私も信じるから！」

「ルイズ、無理して信じようとしなくていい」

「無理なんかしてないもん！ 私も分かるわよ、サイトが嘘ついてないって！」

「ハハ……ルイズもありがとう」

アルシオンとサイトは話を終えると、最後はルイズが語りだした。

トリステインの事、自分はその大貴族ラ・ヴァリエール公爵家の三女であり、上に二人の姉が居る事、ずっと魔法が使えなくて、周囲からバカにされ、『ゼロのルイズ』と呼ばれている事などを二人に話した。

「……それで私はバカにしたみんなを見返そうと必死になって努力したけど……ダメだったわ……」

少し落ち込んでしまった。

魔法は確かにダメだが、座学はトップレベルらしい。

「そっか……ルイズ、苦勞してるんだな」

「前の私だったら、きっとアルやサイトにこんな話はしないわね。それどころか、二人を人間扱いしないわね」

「ウワツ、そりゃ勘弁だな」

「でもね、私は両親からそう教えられたのよ。

物心ついた時から、貴族たる者の在り方、伝統や格式を重んじるよう叩き込まれたの。

私はそれを今までずっと守ってきたのよ」

厳格な両親、特に母親が物凄く規律などに厳しいらしく、ヴァリエール家の全権を事実上、掌握しているらしい。

しかも、その母親は昔、『烈風のカリン』として、トリステインの

魔法衛士隊の隊長をやっていたらしく、数々の武勲を挙げた風のスクエアメイジだとか。

「なあルイズ、その『メイジ』って何なんだ？オレこの世界の事サッパリ分かんないからさ…」

「そっか、サイトは違う世界から来たから分からないわよね。教えてあげる…ってアルは知ってるわよね？」

「ああ、オレは大丈夫だ、だからサイトに教えてやってくれ」

「うん、あのねサイト、メイジって言うのはね…」

ルイズはサイトにハルケギニアの事を出来る範囲で教えた。

ハルケギニアの歴史、国、階級、魔法などを話して聞かせたが、サイトには難しかったらしく、困惑していた。

「ゴメン、ルイズ。

まだオレには…」

「あっ……私こそゴメンね、ちょっと難しかった？」

「あ……あはは…」

ごまかすように笑うとアルシオンがため息をついた。

「ルイズは何も悪くないぞ。

サイトは戸惑っているだけだ、そうだろう？」

「はい：アルさんの言う通りです：」

「暫くここで生活するんだから、少しずつ慣れていくといい。
君にはオレとルイズが居るんだから心配するな」

「そうよ、サイト。」

「私達は貴方が元の世界に帰れるよう、尽力する事を約束するわ！」

「ああ、改めて約束しよう。」

「サイト、オレ達は必ず君を帰す。」

「流石に今すぐは無理だが、ルイズの言葉通り、最善を尽くそう」

「アルさん：ルイズ：」

「サイトは二人の言葉に涙を流した。」

「ハルケギニアに召喚され、気持ちが多少、不安定だったのだ。」

「これから先、自分はどうなるんだろうと不安だったのだが、この二人に出会えてよかったと思えたのだ。」

「アルシオンとルイズ（後でいい子になった）と一緒になら何があっても頑張れると思えたのだ。」

「オレ：今は何も出来ないけど、頑張ります！アルさん、ルイズ！
オレに色んな事を教えて下さい！」

「宜しくな、サイト」

「分からない事があったら言ってね、教えてあげるから」

ここで三人に強い絆が生まれたのである。

夜空を見上げながら、アルシオンは学院内を散歩している。

後ろにはサイトとルイズが居る寮である。

トリスティン魔法学院は全寮制だとルイズから聞いたのだが、実は知っていたのだ。

何故知っているのかと言うと、ルイズからの『伝達』で全てを知ったからだ。

彼女の生まれた時から今までの記憶の全てをアルシオンは知ったのだ。

あのルイズとの使い魔契約時に彼女とキスし、アルシオンの肉体に使い魔のルーンが刻まれる筈だったが、結局、それがなかった。

彼の能力の一つである『念力』でルーンをルイズに間接的に跳ね返したのだ。

だが、跳ね返されたルイズの肉体にルーンが刻まれなかったのだが、代わりに心に刻まれたのだ。

ルイズはアルシオンに自分の全てを伝達し、彼の手足となって動く

ルーンを心に刻まれたのだ。

彼女の情報が勝手にアルシオンに伝わったのはその為だったのだ。

それに刻まれた本人はそれを知らないのだ。

そして、ルイズの使い魔になったサイトも同様で、彼もルイズと同じようにアルシオンに自分の全てを伝達されているのだ。

簡単に言えば二人はアルシオンに監視され、悪く言えば、意志通りに動く操り人形にされたのだ。

当然、アルシオンは基本的に彼らのプライバシーと意志を尊重し、余程の事がない限り、二人を操る事はしない。

（これから先、大変な事になりそうだな…オレはともかく、サイトとルイズには様々な困難が待ち受けているような気がする…だが二人には乗り越えてもらおう、強くなってほしいからな）

夜空に向かって、笑みを浮かべながら歩いていくのだった。

三人の絆（後書き）

次はシエスタをだそうかな？

どの辺りに出そうか検討中です。

シエスタとの出会い、アルシオンの母がサイトの夢に…（前書き）

シエスタのちよっぴりHィ部分を書いたけど大丈夫かな？

もし指摘を受けた場合は修正しようと思います。

シエスタとの出会い、アルシオンの母がサイトの夢に：

夜の散歩をしていると、メイドらしき姿の少女がアルシオンの前に歩いてきた。

仕事の帰りなのだろうが、彼には関係ないので、そのままメイドの横を通り過ぎようとする少女から声を掛けてきた。

「あ、あの……」

「ん？」

サイトと同じ黒髪とそばかすの可愛いメイドがアルシオンを呼び止めた。

「私に何かご用ですか？」

「貴方は確か、ミス・ヴァリエールに召喚されたと言う……」

「ええ、でも召喚されたのは私だけじゃありませんよ、もう一人、メイドさんと同じ黒髪の少年も居ますよ」

「はい、それも聞きました！ミスがお二方を召喚されたと噂がありましたから」

「そうですか、今日からルイズの部屋で暮らす事になりましたから」

「そうですよね、貴族の方と暮らすんですから、色々大変でしょうけど、同じ平民同士、困った事があったら言って下さいね、協力し

ますから」

「ありがとうございます。

ですが、出来る限り自分達で何とかしていきますので、メイドさんのお気持ちだけ、ありがたく頂きます」

親切なメイドに礼を言っ、散歩の続きをする為、この場を離れようとする、メイドが名乗ってきた。

「紹介が遅れましたね、私はシエスタです。

こちらの生徒の方々のお世話をする為に働いています」

「私はアルシオンです、宜しく」

「アルシオンさんですか：ステキなお名前ですね：」

シエスタと言うメイドはアルシオンの顔を見て赤面した。

（アルシオンさんか……お名前だけじゃなく、顔立ちもとってもステキだわ：私達と同じ平民とは思えないわね：）

ウツトリした表情で凛々しい彼の顔をジッと見つめた。

「じゃ、私はもう行きますね。

またお会いしましょう、シエスタさん」

ニコツと微笑むと、シエスタは更に真っ赤になった。

「は、はい！ま、またお会いしましょうね、ア、アルシオンさん！
！」

真っ赤になった顔を両手で隠すように覆い、シエスタは走り去っていった。

「フッ、元気のいい子だな。

シエスタか……近い内にオレ達と何かで繋がりそうだな」

走り去るシエスタを見送った彼は後に自分達と彼女は共に運命を歩んでいくんじゃないかと予見した。

その後、彼は散歩して、キリのいい所でルイズの部屋に戻っていった。

「ハア、ハア……」

使用人の宿舎に走りながら戻ってきたシエスタは自分の部屋に入り、ボタン！と強い音を立ててドアを閉めた。

思い切り走ったのか、それとも何か興奮しているのか、呼吸が乱れ、息切れしている。

「ハア…ハア………フウ…」

ドアに身体を引っ付かせ、何とか呼吸を整え、落ち着いてきた。

「…………アルシオンさん……」

シエスタの脳裏にアルシオンの姿が焼き付き、中々消えない。

そして、彼の笑顔が浮かぶ。

「アルシオンさん…私…」

彼の名前を切なそうに呟くと、何時の間にか、メイド服を床に無造作に脱ぎ捨てており、全裸になっていた。

無意識に脱いでしまったようだ。

シエスタはそんな自分の姿を気にせず、自然とベッドに向かい、仰向けになった。

「あっ……あん……」

自分を慰め始めたのである。

脳裏に浮かぶアルシオンを想いながら、シエスタは自慰に耽るのだった。

ルイズの部屋に戻ったアルシオンは豪華なベッドにルイズが、少し離れた場所の床でサイトが寝ていた。

特にサイトは身体に布団を掛けずに眠っているので、アルシオンが何処から持ってきたのか、手に薄い毛布を母親のような優しい手つ

きでサイトに掛けてやった。

「全く、それでは風邪引くぞ、サイト」

熟睡しているサイトに少し呆れた表情で呟いた。

サイトに背を向けると「…母さん…」と寝言を耳にした。

「……………」

母親の夢を見ているのだろうか？

『サイト君はお母さんが恋しいのね……』

（母さんか………そのようだな）

アルシオンの母の霊体がサイトの側で膝を崩し、彼の額を優しく撫でる。

代行者の能力の一つ『テレパシー』で母子は会話している。

（てっきり故郷に居ると思ったぞ）

『あら、私が居たら迷惑かしら？』

（別に。

それより、どうすれば、サイトを元の世界に戻れるんだろうな…）

『残念だけど、今のアルにはこの子を帰す力がないわ。

失った代行者の力を一刻も早く取り戻さないとね』

（ああ、確か『異界転移』だったな？それがあれば間違いなくサイトを元の世界に戻せるが：オレはまだそいつを取り戻せていないからどうしようもない）

『異界転移』と言う能力があればサイトを帰せるらしいが、アルシオンはまだ取り戻せていないようだ。

『そうね、『異界転移』は代行者の能力の中で、最上級の能力の一つだから、それを取り戻すには相当な時間と経験が必要よ』

（そうだな……）

どうやら『異界転移』はトップクラスの能力らしく、取り戻すにはかなり至難の業らしい。

『……アル、私ちょっとサイト君の夢の中に行ってくるわね』

（母さんに任せるよ、サイトを頼む）

『任せてちょうだい♪』

彼女の霊体がパツと光り、サイトの頭に吸い込まれるようにして行った。

（これで、サイトの不安が消えるといいがな）

サイトの近くに腰を下ろして、起きてくるまで見守る事にした。

サイトは夢を見ている。

今さっき母親が出た夢を見たのだが、その母親がいきなり目の前で消えてしまい、彼女を見つけようと必死になって何もない空間を走り回った。

だが、探しても探しても、母親が見つからず、疲れてきたのか、へたり込み、悲しくなり、泣きそうになる。

「母さん……」

そう呟いても母親が現われてくれる訳ではないので、尚更不安になり、恋しい母親に益々会いたくなってくる。

『あらあら、どうしたの?』

後ろから優しい女性の声が聞こえた。

まさか母さん!?!? と思い、直ぐに振り返ると、そこにサイトの母親：ではなく、青白い長い髪をポニーテールにしたスーパーモデル並の長身の美女が立っていた。

「あ、あれ? 誰かに似てるような……」

青白い美女の顔立ちを見たサイトは、思い当たる人物を頭の中で思い出すと、直ぐに一人の男性の顔が浮かんできた。

「お、お姉さんはひょっとして、アルさんの!?!」

『クスッ、そうよ、私はアル…アルシオンの母『シーラ』よ。
宜しくね、サイト君』

「は、はい! オレ…いやボクの方こそ宜しくです!! (スゴい綺麗な人だな…)」

一人称を『オレ』から『ボク』に慌てて言い換え、アルシオンの母親であるシーラの類い稀な美しさに無意識に見惚れてしまうサイトである。

『そうね…無理もないわね。

いきなり元の居た世界からこっちに召喚されたのだから、不安になるのは仕方ないわね』

「ええ……」

シーラとの会話で幾分、気持ちが落ち着いたサイトは彼女の隣で、一緒に下に腰を下ろしていた。

『ねえ、サイト君』

「はい…」

『サイト君は元の世界に帰れるまではどの道、この世界で生きていかなければならないわ。』

アルは何とかサイト君を帰せるよう、努力すると言ったわ。
だからサイト君もそれまでこの世界で頑張ってほしいの』

「ええ…」

『サイト君にはアルとルイズちゃん、そして私がついてるわ、だからサイト君…』

「えっ？あっ!？」

サイトの後頭部を優しく掴み、そのまま自分の胸に抱き寄せた。

今まで見た事がない程の豊満な胸に抱き締められたサイトは赤面しつつ、戸惑った。

『私はサイト君の本当のお母さんにはなれないけれど、お母さんの変わりにならなれるわ。』

だからサイト君…今は何も考えないで、思い切りお泣きなさい…』

「シーラさん…でもオレ…」

『無理して自分を抑えないで、さあ『母さん』の胸でお泣き、サイト…』

サイトは意地やプライドをかなぐり捨て、シーラの胸で思い切り泣いた。

今まで溜め込んだ分を全て吐き出すかのように…

朝になり、サイトが目を覚ますと、隣に笑顔を自分に向けているアルシオンが居た。

「おはよう、サイト」

「…………おはようございます…シーラさん…」

寝呆けているのか、アルシオンをシーラと間違えている。

「フ…オレは何時から母さんになったんだろうな」

「……………あれ？シーラさんじゃなくてアルさん？」

「そうだよ、やっと目が覚めたようだな、おはよう、サイト」

「おはようございます、アルさん！」

元氣よく朝の挨拶をした。

サイトの表情は昨日に比べて晴れやかになっていた。

何もかも吹っ切れた感じである。

（シーラさん、オレ、この世界で何処までやれるか分からないけど、帰れる日が来るまで頑張ります！見てて下さいね、シーラ母さん！）

シーラにそう誓うサイトであった。

『サイト君、もう大丈夫みたいね、私は貴方が元の世界に帰る日が来るまで見守っているわね。
頑張っ
てね……』

自分の姿が見えないサイトにエールを送るシーラであった。

「ルイズの奴、まだ寝てるな」

「そうッスね、起こしちゃいますか？」

「ああ」

「じゃ同時に起こしましょうか、せーの！」

「「ルイズ、さっさと起きろ！」」

可愛い眠り姫^{ルイズ}を起こし、新しい一日が始まるのだった。

シエスタとの出会い、アルシオンの母がサイトの夢に…（後書き）

次回はキュルケを登場させようと思います。

そして、こちらを暫しのお休みにして、もう一つの作品である『晩年のルイズ』の執筆に入ろうと思います。

キュルケとの出会いとルイズの気遣い（前書き）

アルシオンの出番があまりありませんが、優しい女の子に変化したルイズの思いやりを書きました。

キュルケとの出会いとルイズの気遣い

「ん……あ、お早う、アル、サイト」

二人に起こされ、可愛く欠伸をする。

「悪いけど、二人とも後ろ向いてくれる？……着替えるから」

「あつ、ゴ、ゴメン……」

「分かった」

赤面したルイズの頼み通り、彼らは後ろを向き、ルイズはクローゼットから下着と服を取り出し、着替え始めた。

昨日までのルイズなら尊大な態度で召使に着替えさせたりしていたのだが、アルシオンによって優しい女の子に変化したので、もし知っている人物が今の彼女を見たら、かなり驚愕するだろう。

着替えが終わると、ルイズは二人を食堂に連れていこうとすると、アルシオンは「お前達だけで行ってこい」と言って同行を拒否した。

「でもアル、朝ご飯はちゃんと食べなきゃ……」

「そうですよ、アルさん、そんな事言わないで一緒に行きましょう」

二人がアルシオンを朝食にと再度誘うが返事は変わらなかった。

「オレは大丈夫だ、オレはこれから行きたい所があるからな。」

それよりサイト、お前は昨日から飯食ってないだろ？オレの事はいいから、お前はルイズと食堂に行け」

「で、でも……」

「いいからホラ、さっさと行く。
ルイズ、サイトに食事を頼むよ」

ルイズにサイトを頼むと彼女も渋った表情を見せた。

「でもアル……」

淋しそうな顔をするルイズにアルシオンはヤレヤレとため息をつき、彼女に歩み寄り、サイトに聞こえないよう、小さな声で耳元に言葉を囁く。

「……………」

「……………ボツ！（真っ赤）……う、うん！わ、分かったわ！サイトは私に任せて！」

「じゃ頼むぜ、さ、二人とも早く朝飯に行きな」

ルイズは淋しそうな表情から一転、赤面してアルシオンに従うのだった。

何を囁かれたのだろうか？

「うん！サイト、行きましよう！」

「え？アルさん、ルイズに何を…」

「いいから、サイト、早く朝ご飯に行きましょう」

「お、おい、ルイズ！」

ルイズに背中を押され、部屋を出ていった。

「行ったか、さてと、オレも行くか」

アルシオンはフツと部屋から一瞬で姿を消した。

何処に消えたのだろうか…

部屋を出た二人は食堂に向かうと、サイトと同じくらいの身長の子が現れた。

端正な顔立ちに目が行く程の巨乳、全身が褐色肌の魅力的な女の子である。

「お早う、ルイズ」

「お早う、キュルケ」

互いに挨拶し、キュルケと言う女の子はルイズの隣に居るサイトをみるとニヤリと笑った。

「ルイズの使い魔ってコレ？」

バカにした口調でサイトを指差したが、ルイズはそれをスルーするかのように、普通に「そうよ」と返事した。

「アッハハハハ！ホントに平民ね、スゴいスゴい！」

更にバカにしたのだが、ルイズはちっとも気にしなかった。

ちょっと前の自分なら憤慨して、文句の一つや二つを言っていたのだが…

サイトはバカにしているキュルケに対して少しムカついた。

「人間で悪うござんしたね！」とルイズに変わって文句を言うてやろうかと思ったが、それをそっちのけて、彼女の巨乳を凝視してしまふ。

キュルケがルイズに何か言っているが、サイトは巨乳に夢中になっており、聞こえていない。

「……サイト？何処見てるの？」

「……………へ？あっ！？いや、その……」

「別に構わないけど、あんまりそんな目で女の子の胸を見ると軽蔑されるわよ」

「ゴ、ゴメン！」

ルイズにジーツとジト目で忠告され、慌てて謝ったが、ルイズの中でサイトに対する評価がガタ落ちしたのである。

「あらゝ貴方って私の胸見てたのね？エッチな人」

キュルケは胸を見られているのは慣れているらしく、サイトを責めるような事はせず、笑っている。

「貴方、お名前は？」

「サイト、平賀才人だよ」

「変な名前ね」

「るっさい」

「フフ、じゃあね、お先に♪」

キュルケは二人に背を向け、赤い髪をかきあげ、その場を去っていた。

横にチョコチョコと巨体に似合わない可愛い動きをしている大きなトカゲがキュルケの後を追っている。

「ルイズ、キュルケの後ろに居るアレは何？」

既に居なくなったキュルケの後を追う大トカゲを見て指差した。

「サラマンダーよ。」

キュルケの召喚した使い魔なの」

ルイズは使い魔の事、この世界の生態系などをサイトに説明した。

「スゲエなー、この世界はホントにファンタジーだよ、何でもアリだな」

説明を聞いたサイトはこの世界の生き物の多種多様さに驚きつつ、感心した。

「それよりサイト、早く食堂に行かないと…時間がないわよ」

「あ、ああ、そうだな、早く行こう」

サイトはルイズに食堂を案内されて行くのだった。

食堂に着いた二人は中に入ろうとしたら、ルイズが一瞬、考え事をして「待って」とサイトをストップさせた。

「どうしたんだよ？ルイズ」

「サイト、やっぱりこの中に入らない方がいいわ、ちょっとこっちに来て」

「えっ？」

サイトの手を引いて、食堂を後にした。

二人が向かったのは、食堂の裏にある厨房だった。

「ルイズ、此処は？」

「……ゴメンなさい、サイト」

「へ？何で謝るの？」

ルイズが突然、謝ったので、訳が分からず、尋ねてみた。

「あのね、サイト、あの食堂はね……」

ルイズはさっきまで入ろうとした食堂についてサイトに説明した。

あそこは『アルヴィーズの食堂』と言って、トリステイン魔法学院の教職員や生徒が利用する場所であって、サイトみたいな平民が入れる所ではないらしい。

例え入れたとしても、サイトが周辺から白い目で見られたり、陰口を叩かれたりして、満足に食事が出来ないんじゃないかと氣遣っての行動だった。

「だからちょっと此処で待ってて。

私が厨房の人達にサイトのご飯を用意してくれるよう、お願いしてくるから」

「あ、ありがとう、ルイズ」

ルイズは厨房に向かつていった。

サイトはルイズの気遣いが嬉しかった。

そこまで自分の事を考えてくれている女の子なんて今まで居なかったのだから…

（ルイズ…いい娘だよな…）

胸がときめいてしまったのだった。

ルイズが厨房から出てきて、サイトを連れて、再び中に入ると、そこに中年の太ったコックの服を着た男性が待っていた。

「お前さんがこちらの貴族様の使い魔って奴か？」

「は、はい！オレはサイトって言います！」

男性の貫禄のある立派な髭を生やした顔と声にビビりながら名乗るサイトである。

「それじゃ、サイト。」

私はそろそろ行かないといけないから、コック長さん、サイトをお願いしますね」

ペコリと頭を下げたルイズは食堂に戻っていった。

「サイトだったか？メシを用意してやるからあそこに座って待って

ろ、シエスタ！」

「はい」

シエスタがコック長に呼ばれ、指示を受ける。

「サイトにシチューを作ってやりな」

「分かりました、えっと…サイトさんでしたっけ？直ぐに作りますからちよつと待ってて下さいね」

「は、はい！」

シエスタは厨房の奥にサイトの食事を作りに行った。

厨房ではコック長を始め、何人かのコックとシエスタのようなメイドが忙しそうに料理を作っている。

暫くすると、シエスタがトレーに乗せたシチューを持ってサイトに

「はい、どうぞ」と笑顔で渡した。

「ありがとうございます」

「いいえ、さ、冷めない内に召し上がって下さい、サイトさん」

シチューと一緒に渡されたスプーンを手にとって、いい匂いがするシチューを食べるのだった。

「ご馳走様でした」

「いえ、それよりサイトさん、いい食べっぷりでしたね、作った甲斐がありましたよ」

昨日から何も食べていない為、何回もシチューをお代わりしたのである。

シエスタはサイトが食べ終わった皿を片付けに行くと、入れ替わるようにコック長がサイトの前に現れた。

食堂での朝食が終わり、落ち着いたようだ。

「サイト、お前に聞きたいんだが、あの貴族のお嬢ちゃんに何があった?」

「え? 何がって?」

コック長は何か信じられないと言った表情で、サイトに尋ねた。

「あのお嬢ちゃんは貴族だろ? オレはな貴族って奴が大嫌いだね、オレ達が一生懸命作った料理を選び好みして、気に入らないモノがあったら平気で残しやがるんだよ!」

コック長は貴族に対する、我慢していたような怒りをサイトにぶちまけたのである。

彼は相当な貴族嫌いのようだ。

「だかな、さっき、その貴族がオレの所に来て「私の使い魔にご飯を作ってあげて下さい、お願いします！」って必死で頭を下げられてな、ビックリしたぜ、嫌いな貴族がオレに頭を下げてんだぜ」

「ルイズがそんな事を……」

コック長の話を聞いてサイトも驚いた。

（オレの為にルイズが……よし、オレは使い魔として、出来る限りルイズを助けよう！）

サイトは優しいルイズの使い魔として、恩返しをしようと決意したのだった。

「「出来るだけみなさんにお礼はしますからどうかサイトをお願いします！」って懇願されたら流石に断れねえからオレは……」

「あ、あの！」

コック長の言葉を遮るように、サイトが勢いよく、立ち上がった。

「オレがルイズに変わってお礼します！だからオレに出来る事があったら何でも……」

「サイト、オレはな、思ったよ。

貴族も捨てたモンじゃないってな、貴族の中にあんないい娘が居るんだってな……」

「コック長さん……」

「だからサイト、礼なんかいらねえよ！逆にこっちが礼を言いたいよ、貴族に対する気持ちを变えてくれてありがとよ……サイト、メシが食いたきゃ何時でも来い！あのお嬢ちゃんにも旨いもん食わしてやるからサイトと一緒に来なよって伝えてくれ」

「はい、コック長さん！」

「オレはこの厨房を仕切ってるマルトーだ、宜しくな、サイト」

「こちらこそ宜しくお願いします、マルトーさん」

コック長はサイトにマルトーと名乗った。

後からコックやメイド達がやってきて、それぞれ自己紹介をして、色んな話をした後、サイトは満ち足りた気持ちで、厨房を後にすると、直ぐ目の前にルイズが待っていた。

「サイト、朝ご飯美味しかった？」

「ルイズ……オレは君に感謝してるよ、使い魔として、頑張らせてもらうよ」

「もう、サイトっては何言ってるのよ？サイトはサイトよ。」

貴方はただ使い魔のフリだけしてくれればいいんだから……それでね、サイトにお願いがあるんだけど……」

「何でも言ってくれ、ルイズ」

ルイズのお願いとは、一緒に教室に来て欲しいそうだ。

何でも、今日は、昨日の使い魔召喚の儀式で召喚した使い魔を教室に連れていけないといけないらしい。

「それくらいお安い御用だよ、ルイズ」

「ありがとう、サイト。」

教室についたら何もなくていいわよ、ただ私の隣に居てくれるだけでもいいからね」

「あ、ああ、分かった」

ルイズの可愛いお願いに胸がキュンときめいてしまった。

とうとう、ルイズに惚れてしまったようだ。

サイトの気持ちをよそにルイズはサイトを連れて、教室に向かっていったのである。

キュルケとの出会いとルイズの気遣い（後書き）

次回は教室での出来事を執筆しようと思います。

アルシオンの出番があるかどうかはオレも分かりません……

教室で爆発！『ゼロのルイズ』の意味（前書き）

今回は時間の都合上、短めに執筆しました。

今回はアルシオンに出番がありません。

教室で爆発！『ゼロのルイズ』の意味

大学の講義室のように広い教室に着いたルイズとサイトは注目の的になっていた。

特にサイトが生徒達にバカにするかのように笑われている。

そんな彼らに一瞬だけムツとしたが、ルイズがサイトの袖をちよつと引っ張った。

「サイト、授業が終わるまで我慢して、お願い…」

サイトの耳元でお願いされると、サイトは「大丈夫だから気にすんなよ」と安心させるような言葉を送った。

聞いてみると、召喚した使い魔を授業の初日に連れていけないといけないらしい。

サイトはそんなルイズの願いを断る気がないし、ルイズの頼みなら出来る限り、それに応えるつもりであった。

周りを見渡すと、生徒達は色んな使い魔を連れてきている。

この世界の人間には当然だが、サイトの世界では幻想の生き物だった生物が目の前に居るのだ。

好奇心旺盛の彼はそんな多種多様な生物に感動し、ルイズに色んな生き物の名前を聞き、ルイズが微笑ましく答えた。

生物を観察している時に偶然、寮の廊下で出会ったキュルケが多くの男子生徒に囲まれているところを見つけた。

キュルケは楽しそうに男子生徒達と談笑しており、その中に、サイトみたいは彼女の大きな胸をジッと見ている男子が何人か居たが、キュルケは全く気にしていない様子だ。

教室の扉が開くと、教師らしい女性が入ってきた。

生徒達はその教師がやってくると、自分の席に戻り、キュルケを囲んだ男子生徒達も席に着いた。

紫のローブに身を包み、ふくよかで優しそうな中年女性である。

「みなさん、春の：」

女性が話をしているがサイトは特に興味がなく、珍しい生物に目を奪われ、ジロジロと生徒達の使い魔を見ていた。

教師が「変わった使い魔を召喚しましたね」と言う言葉をきっかけに生徒の誰かが「『ゼロのルイズ』！召喚出来ないからって平民を連れてくるな！」とルイズを笑いながら、バカにした。

サイトはルイズを侮辱した太った生徒に文句を言ってやろうと立ち上がると、ルイズが「私は大丈夫だからサイト、お願いだから落ち着いて！」とサイトを宥めた。

ルイズにそう言われると、サイトは仕方なく冷静になり、席に着いた。

教師がバカにした生徒の口に魔法で黙らせ、それでも懲りずに侮蔑の言葉を吐く彼の口に教師が黙らせようと赤い粘土のようなモノを押しつけ、黙らせ、今まで笑っていた生徒達がそれを見て、笑うのを止めた。

静かになった事を確認した教師は授業を始める前に、自分を『赤土』のシュブルーズと名乗り、授業を開始した。

サイトは悔しかった。

あの太った生徒が言った『ゼロのルイズ』と言うのは何の意味があるのか？

それも気になるが、そんな事よりもルイズがバカにされた事に物凄く腹を立てていた。

好きな女の子が侮辱されたので当然なのだ、今からでもそいつをぶん殴ってやりたいが、ルイズに止められているのでどうする事も出来ないのだ。

ルイズを困らせたくないからである。

そんなルイズは現在、真剣にシュブルーズの授業を聞き、ノートを取っている。

ルイズから色々と聞きたい事があるのだが、真面目に授業を受けて

いる彼女の邪魔をしたくないので、それは授業が終わった後に聞こうと決め、大人しくするのだった。

授業が進むと、シュブルーズがルイズを指名し、そこにある石ころを金属に変えるように言った。

指名されて、困っているルイズにキュルケがシュブルーズに「ルイズにさせないで下さい!」と忠告したが、「失敗を恐れていたら何も出来ないからやりなさい」と聞き入れられず、シュブルーズの言葉にルイズは立ち上がり、教室の前に歩いた。

「ルイズ!お願いだから止めて!」

キュルケが青ざめた表情で懇願したが、ルイズは無視し、シュブルーズの前に立った。

シュブルーズが笑顔でルイズに『鍊金』のやり方を教え、実行するように言うと、ルイズは頷き、手に持った杖を振った。

呪文を詠唱していると、前の席に座っていた生徒達が慌ててイスの下に避難するかのように隠れ始めた。

サイトはそんな彼らを見て「アイツら、何やってんだ?」と不思議に思った。

ルーンを唱え、杖を振り下ろすと、石ころが突然、爆発した。

爆風を受けたルイズとシュブルーズは黒板に叩きつけられ、悲鳴が上がり、使い魔達が暴れだした。

様々な使い魔が火を吹いたり、窓ガラスを割ったり、同じ使い魔を飲み込んだりと、まるで地獄絵図である。

そんな中、キュルケを筆頭にルイズを指差してギャーギャーと文句を言った。

サイトは唾然としており、シュブルーズは倒れたまま、動いていないが気を失っているらしく、死んではいないようだ。

起き上がったルイズは爆発で制服がボロボロになり、顔は煤で真っ黒になった顔を取り出したハンカチでそれを拭き取る。

そして気絶しているシュブルーズを見てため息をついた。

「みんなの言う事を聞いてれば、こんな目にあわずに済んだのに……」

憐れんだ瞳でそう呟いた。

「やっぱり『ゼロのルイズ』だ！」

「魔法の成功率が何時も『ゼロ』だからな、ルイズは！」

再び野次が飛んだ。

サイトはルイズが何故『ゼロのルイズ』と言われている意味が分か

ったのである。

（何がゼロのルイズだ！関係ねえよ！テメェら見てろよ、ルイズが絶対に魔法を使えるようにしてやるからな！今の内に笑ってろ！）

ルイズを非難している生徒を睨み、何時か見返してやると心から誓ったサイトであった。

教室で爆発！『ゼロのルイズ』の意味（後書き）

今回はギーシュの登場＋決闘もちろんサイトです。

平民のサイトはメイジのギーシュとどんな戦いを繰り広げるのか？

次は『晩年のルイズ』を更新します。

ボロボロのサイト（前書き）

アルシオンを今後どう扱おうか考えています。

サイト達を影でサポートするか、それとも表舞台で大暴れするか…

ボロボロのサイト

ルイズは意識を取り戻したシュブルーズに爆風でメチャクチャになった教室の後片付けを命じられた。

サイトはルイズの手伝いをしようとしたら、彼女に自分がやった事だからなくていいと最初は断られたが、サイトは知らん顔して、女の子一人にこんな事をさせられないとルイズに言い聞かせ、一緒に片付けを開始したのだった。

「分かったでしょ？ 私の事が……」

「何がだよ？」

「私が『ゼロのルイズ』と言われている理由……」

「……………」

サイトはこんな時に落ち込んでいるルイズに何を言えがいいんだろうと悩んだ。

こんないい娘を慰めてやりたい、元気づけたいが言葉が見つからないのだ。

ルイズから、生まれて一度も満足に魔法が使えた試しがない事を聞いた。

その為に、周囲から落ちこぼれメイジなどとバカにされてきたらしい。

一生懸命、努力しても結果は変わらず、このトリステイン魔法学院に入学しても、同じだったのだ。

「私ってやっぱり魔法の才能がないのかしら……」

「そんな事はねえよ、ルイズ！オレは魔法の事なんかよく知らねえけど、ルイズが頑張り屋だから、何時か絶対に魔法が使えるようになるって！だからそんなに落ち込むなよ、な？」

「ありがとう、サイト……」

サイトの慰めに感謝しつつ、それでも少し淋しそうに笑うルイズである。

二人は話を止めにして、作業に入った。

ルイズとサイトが教室で後片付けをしている同時刻、トリステイン魔法学院の近くの森にアルシオンが質素な小屋の前に立っていた。

「こんなものでいいだろう」

アルシオンは青白い髪をかきあげ、小屋に入っていた。

『上出来よ、アル。』

『……でも小屋を作ってどうするつもり？』

どうやら、この小屋をアルシオンが能力『念力』を使い、一瞬で作ったらしく、シーラがアルシオンに質問する。

「決まってるだろ？ここをオレの家にするのさ。
ずっとルイズの部屋に住む気はないからな」

『あらあら、ルイズちゃんがそれを聞いたら悲しむわよ。
あの娘、貴方を好きみたいだから』

「ルイズとサイトと暮らすのは悪くないが、オレにも都合ってモノがあるから、今日から此処に住むよ」

『アルがそう言うならそれでいいけど、サイト君はどうするの？此
処で一緒に住むの？』

「いや、形式上、サイトはルイズの使い魔だから、アイツはルイズ
の部屋に住んでもらう。
オレだけ此処に住むよ」

小屋の中でアルシオンは、『念力』で生活に必要な備品を作り、整
理した。

おまけだが、アルシオンの作った小屋は彼の故郷にある家と同じ姿
にして作ったのである。

それなりに時間が経ち、『念力』による小屋の建築と生活必需品の補充が終わると、ルイズとサイトに此処で暮らす事を報告しようと思ひ、小屋を出て、寮に向かった。

朝に使った能力『瞬間移動』を使わずに。

向かっている途中、いきなり走ってきた一人のメイドとぶつかった。

「す、すみません!!」

「いや、構わないよ」

ぶつかってきたのは、黒髪のメイドのシエスタだった。

「あ……貴方は…アルシオンさん…」

「シエスタさんか、そんなに慌てて、どうしたんですか？」

青ざめているので、何かあったのかと思ひ、理由を聞く。

「じ、実は……」

シエスタの話によると、厨房に夕食を食べに来たサイトがシエスタの仕事を手伝いたいと言ってきて、彼に食堂でデザートを運ぶのを手伝ってもらっていた時に事件(?)が起こった。

サイトが金髪の男子生徒と何かを口論し、最後はその男子生徒から礼儀を教えてやるから後で広場に来いと言われ、サイトはそれを受けたそうだ。

シエスタはそれを見て、サイトが殺されると思い、無意識に逃げた。しまい、此処まで逃げて、アルシオンとぶつかって今に至るのだった。

「シエスタさん、その広場って確かヴェストリの広場か？」

ルイズの知識を使ってその広場をヴェストリの広場と確認すると、シエスタは頷いた。

アルシオンはシエスタと別れ、ヴェストリの広場に向かった。

ヴェストリの広場に到着したアルシオンは、この広場は生徒達で溢れている。

その中央に顔面に殴られたようなアザができ、座り込んでいる金髪の生徒と、もう一人は全身を傷だらけで、片手に持った剣をその生徒に向けているサイトが居た。

彼らは何か話しており、サイトが剣を放り投げた。

側で見えていたらしいルイズがサイトに駆け寄り、彼は地面に倒れた。

ルイズは倒れたサイトを揺さぶり、それを見たアルシオンは二人の元に駆け付けた。

「ルイズ」

「ア、アル！……サイトが……」

涙目になっているルイズを一瞥し、騒いでいる生徒達を無視し、重傷を負って倒れたサイトを診る。

（死んではいないが、危ない状態に変わりはない。
早急に治療しなければならんな）

「ルイズ、サイトを運ぶぞ、ついてこい」

「う、うん！」

金髪の生徒に目もくれず、サイトを抱え上げ、ルイズと広場を後にした。

サイトの相手をした金髪の生徒は、状況により、アルシオンとルイズに話し掛ける事が出来ず、ポカンとして、座り込んでいた。

ルイズの部屋に戻り、サイトをベッドに寝かせ、アルシオンは右手

を広げると、その掌から青白い光が放たれ、それを浴びたサイトの身体中にあった傷痕が綺麗に消え、ボロボロになった衣服も元の状態に戻った。

能力『癒しの光』で完治したのだ。

「アル、今のは？」

「オレの力でサイトを治療しただけだ。
これ以上の質問は受け付けんど、いいな？」

ルイズは素直に頷き、アルシオンに事の全てを話した。

決闘をふっかけた金髪の生徒はギーシュと言って、後から分かったのだが、彼はモンモランシーと言う彼女がいながら、後輩と二股をかけたらしく、それがバレて、二人に振られた(?)らしい。

バレた切っ掛けを作り、シエスタの手伝いをしていたサイトに言い掛かりをつけ、口論となり、最後はヴェストリの広場で決闘する事になり、ルイズはサイトに決闘を止めるように言ったが、聞き入れず、広場に行ったらしい。

噂を聞き付けた生徒達が広場に集まり、ギーシュとサイトは決闘を始めたが、ギーシュは魔法を使い、丸腰のサイトは一方的にやられ、ルイズが止めようとしたが、サイトは意地を張って拒否し、ギーシュがサイトに剣を作って与えると、それを受け取ったサイトに突然、変化が起こった。

剣を取った途端にサイトの動きが早くなり、ギーシュの魔法で作った青銅の人形を次々と斬り倒し、最後はギーシュの顔面に蹴りを入

れて、彼は降参し、サイトの勝利で決闘は終わった。

「そうか」

ルイズの話聞いたアルシオンは呆れ顔で気持ち良さそうに寝ているサイトを見てため息をついた。

サイトはそのまま部屋で朝まで眠り、ルイズはアルシオンと小屋に行き、そこで一晩泊まっていた。

ボロボロのサイト（後書き）

次回はサイトがアルシオンに嫉妬する話を書こうかと思っています。

アルシオンを熱い目で見つめるルイズにサイトは：

あくまで予定ですけどね（笑）

ひよっとしたら別の話を書くかもしれせん。

サイトの失恋（前書き）

ルイズの性格を変えましたが、ツンのルイズファンの方々にとっては好ましくないかもしれません。

ですが、こんなルイズもいい！と言うお言葉を頂きましたので、このまま執筆します。

サイトの失恋

「ん……ふぁゝゝつ…」

ギーシュと決闘した翌朝、サイトは目を覚ました。

「あれ？このベッドってまさかルイズの？」

ルイズの部屋のベッドで寝ていたので、慌てて身体を起こした。

「ヤバ！オレ何でルイズのベッドに？……ん？身体の傷が……ない！？」

昨日、ギーシュの青銅のゴーレムにボコボコにされ、かなりのケガを負った筈なのに、完治しているのだ。

しかも身体だけじゃなく、ボロボロになった服も元通りになっているのだ。

幾らいい薬や治療をしても、あれだけの大ケガをたった一日で治せるのだろうか？

夢でも見たんだろうか？

あの時、左手で剣を握ったら、形勢逆転して、ギーシュに勝利したのだ。

サイトは使い魔のルーンを刻まれた左手を見る。

「オレがアイツに勝てたのはコイツのお陰か……」

剣を握った時に、左手のルーンが光り、身体の痛みが消え、羽のようになり、ゴーレムを斬り倒したのだ。

万策尽きたギーシュが負けを認め、ルイズが駆け寄ってくるところまでは覚えており、その後、意識を失ったのだ。

「そんな事より、ルイズとアルさんは居ないな……何処行ったんだろ？」

部屋にはサイト一人だけで、アルシオンと部屋の主であるルイズの姿はなかった。

アルシオンが作った小屋の中のベッドで、ルイズはゆっくりと目を開けた。

「あ……ヤダ！」

起き上がったルイズはバツと布団で身体を隠す。

ルイズは裸で寝ていたようだ。

「……………」

思い切り赤面し、昨日、サイトを部屋に残し、アルシオンに彼が作

ったこの小屋に連れていかれ、一夜を過ごした事を思い出した。

昨日の朝、アルシオンから、言う事を聞いたら後で『ご褒美』をやると言われ、素直に従ったルイズは、昨夜、この小屋でアルシオンから熱く、激しい『ご褒美』をもらったのである。

（は、初めてだったのに……もう、アルったら私にあんな事やこんな事して……は、恥ずかしい！！）

あの時、無意識にこの小さな身体に似合わず、信じられない程、激しく乱れた事にルイズは気付いていないようだ。

気を取り直して、脱いでいた下着を着け、制服を着て身なりを整えると、小屋のドアが開き、上半身が裸姿のアルシオンが入ってきた。

「お早う、ルイズ。

よく眠れたか？」

笑顔で朝の挨拶をする。

「！！……お早う、アル……」

アルシオンの爽やかな笑顔と頼もしく、逞しい肉体に再び赤面し、目を背けた。

「そ、それより、アルは今、何してたの？」

「鍛練だよ、オレの日課だからな」

「ふうん……どんな風に？」

「主に剣の素振りとランニング、そして筋力トレーニングを時間がある時にしているんだ」

基本的に毎朝、自己鍛練している事を話した。

上半身が裸だったのは、トレーニングの時に脱いだらしい。

アルシオンの話を聞いているうちに、ルイズはソワソワした。

話を終わると、アルシオンはルイズに朝食に行くように言うと、彼女はウンともスンとも言わず、ジーツとアルシオンを見つめた。

「どうした？早く食堂に行かないとまずいんだろ？」

「アル……………」

「ん？」

「朝ご飯行く前に…………キス…………して」

「いいぞ」

「エヘヘ…………ありがとう！」

アルシオンに可愛くピョンと抱きつき、キスをした。

「ん…………んんっ…………は…………ん…………あう……………」

軽いキスから徐々に濃いキスに変わり、スイッチが入ってしまった

ルイズはとうとうキスだけで満足出来なくなり、しがみついたまま、着たばかりの制服と下着を床に脱ぎ捨て、アルシオンに抱かれたのである。

「ゴ、ゴメンね、アル……」

「何も謝る事はない、お前の意外な一面を見れたからな」

「ウーッ……それを言わないで……自分からしておいて何だけど……思い出すと恥ずかしいわ……」

ルイズはアルシオンにおんぶされて厨房に向かっている。

やり過ぎて、腰を抜かしたらしいが、アルシオンは平然としていた。

ルイズはともかく、アルシオンはあれ程激しく交わっても、精力と体力を全く消耗していないのだ。

恐ろしい程タフさである。

「ルイズ、どうして、朝飯前に求めたんだ？」

「……い、言えないわよ、そんな事！……分かってるくせに……アルの意地悪！」

「フッ、安心しろ。」

前にも言ったが、お前の意志を尊重してるから、思っている事は伝わらないようにしている。

だから今、お前が何を考えているのか知らないよ」

「そ、そう？」

「オレを信じろ」

「うん、私はアルを信じてる」

アルシオンの言葉にホッと安心し、背負われた状態で、ギュツとしがみついたのだった。

アルシオンの何も着ていない上半身姿に欲情してしまったと流石に言えなかったのだ。

まだアルヴィーズの食堂での朝食の時間に合うのだが、ルイズはもうそこで食事をする事を止め、厨房で食事する事にした。

自分でもよく分からないが、あそこで食事すると、気分が悪くなりそうだからと言う理由で。

高慢で、気性が荒く、わがままで、プライドが高く、独占欲が強く、平民を軽視していたルイズだが、今のルイズはそれら全てをアルシオンによって取り払われ、素直で、優しく、思いやりのある可愛い女の子に変貌したのだ。

厨房に着くと、腰の力が戻ったらしいルイズを下ろし、中に入ると、サイトが既にそこで食事をしていた。

「アルさん、ルイズ、昨日は何処に行ってたんすか？」

「お早う、サイト。」

「そんな事より、もう身体の方は大丈夫なの？」

ルイズはサイトの問いをさり気なくスルーし、体調を心配そうに氣遣う。

「お、おう（赤面）！全然大丈夫だよ！」

ルイズの上目遣いに赤面し、動揺しまくるのである。

（やべ、ルイズ…可愛すぎる…）

ルイズの可憐さにドキドキしてしまい、ますますルイズを好きになつてしまったようだ。

「おっ、アンタか、どうしたんだ？食堂に行かねえのか？」

コック長のマルトーがルイズに声を掛けた。

ルイズはマルトーにもう自分はその食堂で食事しないから、今日から此処で食事をさせてくれと頼んだ。

メイジの職員と生徒が集まる食堂は自分にとっては気分が悪くなりそうだから食事したくないと話し、それを聞いたマルトーはとても驚いたが、ルイズの真剣な表情と力強い言葉に感心し、彼女に頼みを快諾したのだった。

ルイズはアルシオンをマルトーに紹介し、ルイズの友達ならと言う

事で、彼も此処で食事をする事になった。

食事を済ませ、三人は厨房を出ると、サイトが二人に理由を尋ねる。

「アルさん、朝何処に行ってたんですか？ルイズも部屋に居なかったら何処に行ったのかなと思って」

ルイズは赤面しつつ、言いづらそうな、気まずそうな表情をしたが、そんな彼女に代わってアルシオンが答える。

「昨日、お前のケガの治療をした後、ルイズのベッドに寝かせたんだ」

「えっ！？オレのケガをアルさんが治してくれたんですか？あんな酷いケガを、しかもたった一日で……」

「ああ、直ぐに処置しなければ危ない程だったぞ」

「あ、ありがとうございます…」

申し訳なさそうに礼を言う。

「サイト、どうしてあの時、私がギーシュと決闘をやめてって言ったのに聞いてくれなかったの？」

「アイツがお前をバカにしたからだよ、二股かけて振られ、オレに

言い掛かりつけて、ケンカ売りやがったからな。

それだけじゃなく、ルイズをバカにしやがったからそれが尚更許せなかった……」

「サイト……だからって……」

サイトの話にルイズは悲しい顔をした。

自分の事なんかより心から、サイトの身を案じていたルイズの気持ちをサイトを気付いていなかった。

サイトは確かに決闘に辛くも勝利したが、ルイズは素直に喜べなかったのだ。

「サイト、私の事を悪く言われても、もうあんな事しないで、後で酷い目にあうかもしれないのよ」

「大丈夫だって、心配するなよ！このルーンの力があるから、オレがルイズを守るよ。」

お前を悪く言う奴や手を出そうとする奴はオレがぶっ飛ばしてやるよ！」

「サイト……」

やはりルイズの気遣いを理解していないようだ。

ルイズはサイトが後で彼にやられた者から質の悪い報復を受けるのではないかと心配してそう言ったのだが、今のサイトにはそれが伝わっていないのだ。

ルーンの力を得て、強くなったと舞い上がっている今のサイトに何を言ってもムダのようだ。

そんな調子に乗っているサイトにアルシオンは知らん顔して、話の続きを再開する。

「疲れていたお前を気持ち良く寝かせようとルイズに頼んでベッドにお前を寝かせ、オレは昨日作った小屋にルイズを連れていき、泊めたんだよ」

「そうなんです……か？……ルイズを泊めたってアルさんそれって……」

調子に乗っていたサイトの表情が少しずつ険しくなった。

「だから、オレ達はその小屋で『寝た』んだよ」

「……………」

アルシオンの言葉に哑然となる。

ルイズと『寝た』？思考が混乱しかけていた。

「意味がよく分かんないんですけど……ルイズ、アルさんと寝たって何だよ？それに小屋って……」

アルシオンが作った小屋も気になるが、そんな事より、今はルイズがアルシオンとどんな形で一晩過ごしたのかが気になって仕方がないのだ。

ルイズはアルシオンと一夜を共にした事を思い出したのか、さつきまで心配した顔から赤面して、恥ずかしそうにモジモジしている。

「ルイズ、アルさんとその小屋で何してたんだよ？」

「そ、それは……」

真っ赤にした顔を両手で押さえ、身体をクネクネさせている。

「サイト、オレ達はそこで……」

アルシオンはルイズと一夜を過ごした内容を躊躇いなく、ストレートに赤裸々に説明すると、サイトは思考が停止したかのように茫然自失した。

「も、もう、アルってば！何もサイトに私達の事を暴露しなくてもいいじゃない！！」

真っ赤にして、アルシオンを非難しているが、内心、喜んでいるルイズに彼は声をかける。

「オレは知られても別に構わん。

悪い事してるわけじゃないからな、だからルイズも自信を持って堂々と胸を張れ。

オレ達は身も心も繋がっているってな」

「アル……うん、私達は……ううん、私はアルに身も心も捧げてるから。

だから私はアル、貴方のモノよ……」

ウツトリした表情でアルシオンの所有物宣言したルイズは彼にソツと寄り添った。

目の前にサイトの存在を忘れていようだ。

「ウ、ウソだ………」

ワナワナと身体を震わせ、そして…

「ウソだーーーーッ!!!!」

サイトは二人から思い切り走り去った。

失恋したのだ。

しかも、自分の前で好きな女の子と相手の男との肉体関係を直接モロに暴露されたので、そのショックはとて大きいかも知れない。

「あれ？サイトは？」

「今走って何処かに行ったよ」

「ふーん、何処に行ったのかしら？」

「アイツなら大丈夫だ、時間が経てば元に戻るだろう」

「？」

サイトの気持ちに全然気付いていないルイズはアルシオンの言っている意味が分からないのだが、サイトがルイズを好きだと知ってい

るアルシオンはそれを知っていながら、成り行きで、ルイズとこんな関係となった。

（サイト、女が欲しいなら、先ず己自身の器を理解し、磨け。そして、何時か自分の手で正々堂々と掴み取れるようになれ）

もう居ないサイトに心からエールを送るのだった。

サイトの失恋（後書き）

今回はサイトとギーシュが親友に！サイトに美少女の影が…

次は『晩年のルイズとその家族』を更新します。

失恋のサイト、新たな恋を探す決意をする（前書き）

サイト……まだまだこれからだよ。

君にはまだ先がある……と思うよ？

失恋のサイト、新たな恋を探す決意をする

「……………」

サイトはルイズがアルシオンとあんな関係になった事を知ってしまい、彼らから走り去り、一人とある広場のベンチに座り、落ち込んでいる。

「まさかルイズがアルさんとデキてたなんて……」

好きな女の子がアルシオンと関係を持ち、しかも、彼の『モノ』宣言したので、そのショックはかなり大きいだろう。

「どんな顔してルイズに会えばいいんだろうな……」

ボソボソと呟いていると、サイトに声を掛ける人物が現われた。

「君は……ルイズの使い魔の……」

昨日、決闘したギーシュだった。

「あ……お前は……」

ギーシュの声に顔を上げた。

「……オレに何か用か？」

「もうケガが治ったのかい！？ 昨日は僕にアレだけやられて、しかもたった一日で……」

ギーシュはサイトの完治した身体を見て驚いた。

学院に居る『治癒』の魔法が使えるメイジでも、あれ程のケガをたった一日で治すなど出来はしない筈だ。

ギーシュはどうやってあんな大ケガを治したのか聞いたが、サイトは答えなかった。

アルシオンが治したのだが、それをこのギーシュに話す義理もない。どうやら教えてくれないみたいだから、それを諦め、落ち込んでいる理由を聞いてみる事にした。

「どうしたんだい？ そんなに落ち込んで…何かあったのかい？」

「お前には関係ないだろ？ 用がないならどっかに行ってくれ…」

「…………その様子じゃ、何かあったようだね？ よかったら僕に聞かせてくれないか？ 話せば少しでも気持ちが軽くなる事だってある…」

「……………」

「紹介がまだだったね、決闘の時に名乗ったから知ってるだろうけど、僕はギーシュだ。」

ギーシュ・ド・グラモン。

よかったら、君の名前を覚えてくれないか？」

「……オレはサイト、平賀才人だ」

お互いに名乗り、ギーシュはサイトが座っているベンチに腰掛けた。

「……と言う訳だよ…」

サイトは何故か、ルイズに恋した事、そして、失恋した事をギーシュに話してしまった。

少しでもスッキリしたくて、誰かに話を聞いてもらいたかったのだろうか？

「そうか、『君も』か……」

「え？君もって、まさかお前……」

ギーシュは苦笑いした。

「ハハ……実はね…僕もケティとモンモランシーに振られてしまったよ…」

自嘲っぽく笑った。

「あのさ、そりゃ、二股かけたお前が悪いだろう？どう考えても…」

「ハ、ハハ……返す言葉がないね」

気まずそうに笑うギーシュに呆れ顔になるサイトである。

二人は世間話などしながら、互いの失恋を慰め、励まし合い、友人

となった。

キリのいいところで、ギーシュと別れたサイトはルイズの部屋に戻ろうと、寮に向かった。

正直な気持ち、アルシオンとルイズが居る部屋に戻るのは少し辛い
が、サイトには他に行くところがないのだ。

ギーシュとの会話で少しだけ気持ちが軽くなったとはいえ、失恋から完全に立ち直った訳ではないので、苦しい思いを押さえ、戻るのだった。

アルシオンとルイズは部屋でサイトの帰りを待っていた。

サイトが二人の前から走りながら、去っていったが、落ち着いたら戻ってくるだろうと判断し、待っているのだ。

「「……………」」

二人は何もせず、黙ったままである。

その数分後、ドアがノックされ、ルイズがドアを開けると、サイトが居た。

「サイト」

「た、ただいま……」

ルイズは元氣のない顔をしたサイトを中に入れた。

「サイト」

「ア、アルさん…オレは……」

「オレに話したい事があるんだろ？とにかく、そこに座れ」

「はい……」

部屋にイスが一つしかないので、サイトは促された床にそのまま座り、アルシオンも座った。

ルイズも一つしかないイスに腰掛けようとせず、彼らの傍にそのまま床に座った。

「ルイズ……オレは君の事が…その…」

「サイト？」

「え……えっと…その……つまり……」

ルイズが好きだ！と言いたいのだが、いざ本人の目の前だと、言う勇氣がなかなか出ず、ハッキリと言えない。

「ルイズが好きなんだろう？ サイト」

「ブッ！！ア、ア、アルさん！！何を！？」

アルシオンの口からズバツと、ルイズへの恋慕を吐き出され、吹き出し、激しく動揺した。

「サイト……そうなの？」

「う………」

自分の想いをルイズにモロにバラされ、俯いてしまう。

「サイト、そうなんだろう？ ハッキリ言うんだ。
もう隠す必要がないんだからな」

「……………ルイズ、オレは……………君の事が……………好きだ……」

観念したようにルイズに告白した。

「サイト………」

「何で好きになったかわかんないけど……………君を一目見た時から好きになってたんだ……………」

「……………ゴメンなさい、サイト。」

私は貴方の気持ちに応えられないわ……」

「ッ！……………そ、そうだよな、ルイズにはアルさんがいるもんな……………」

「本当に……ゴメンなさい……でも、私はサイトの事は友達として好きよ……今でも大事なお友達に変わりはないわ」

「……………」

「サイトは私にとっては使い魔じゃなく、大事な友達であり、仲間であなの……だから……」

「もういいよ、ルイズ。」

オレは君に好きだと言う気持ちを伝えられて少しだけ気持ちが軽くなったよ……」

「サイト……」

「気にすんなよ、オレは諦めるから。」

アルさん」

アルシオンに顔を向けた。

「ん？」

「ルイズの事をお願いします。」

オレは此処を出ていきますから」

好きだったルイズとこの部屋で暮らす事が出来ないの、出ていく事にしたのだ。

「サイト、何言ってるのよ!?! どうして出ていくのよ?」

「住めるわけないよ、どんな気持ちで此処に居ればいいんだ？」

自分を振ったルイズとその恋人（ご主人様である）であるアルシオンと屋根の下で暮らすなんて拷問のようなモノだ。

「サイト、出ていくのか？」

「はい、今からでも出ようと思います」

「それで、行くところはあるのか？」

「あっ……………」

アルシオンの問いに言葉が詰まった。

アテがないのだ。

何の考えも無しに出ていくなんて…

サイトは後先を考えない性格のようだ。

「無いようだな、サイト。」

仕方ない、お前に『アレ』をやらう、ついてこい」

「『アレ』って何すか？アルさん」

「ついてくれば分かる、とにかく来い」

アルシオンはサイトを連れて、部屋を出て、ルイズも二人の後を黙ってついていった。

アルシオンが言う『アレ』とは一体何なのだろうか？

「此処だ」

「アルさん、これは……」

アルシオンが作った小屋に連れてこられ、サイトは目前の小屋を見て呆然とした。

「サイト、これをお前にやるよ、好きに使え」

「えっ？この小屋ってアルさんのですか？アルさんが言った『アレ』ってまさか……」

「そうだよ、今からこの小屋はお前の物だ。大事にしろよ」

そう、アルシオンがサイトにプレゼントすると言った『アレ』とはこの小屋の事だった。

本当はアルシオンがこの小屋に住むつもりで『念力』を使って作ったのだが、一人で住むアテのないサイトにやる事にしたのだ。

「い、いいんですか？」

「構わん、もうお前の物なんだからな」

「アルさん、ありがとうございます！」

サイトはアルシオンに礼を言って小屋を受け取り、此処に住む事にした。

小屋に入ると中には生活に必要な家具が十分に揃っており、住み心地は悪くない。

充実した小屋に満足したサイトとアルシオンはそこで別れ、ルイズと寮に戻っていった。

帰る途中、ルイズが話し掛ける。

「アル」

「何だ？ルイズ」

「よかったの？あの小屋はアルが……」

「別にいいさ、絶対に必要って訳じゃなかったからな」

「そう、アルがそれでいいなら……でもサイトに悪い事したかな……」

申し訳なさそうな表情になる。

サイトを振った事を引きずっているようだ。

「何も悪くないぞ、ルイズはサイトが好きだが、それは友達として好きであって異性として好きじゃなかっただけ。ただそれだけだ」

「……………」

「素直に答えた事はいい事だ、悪い事じゃない。お前はそのままでもいい」

「いいの?」

「当然だろ? お前は気持ちを押さえないで素直に、正直に生きればいい」

「そうよね、うん、サイトには悪いけど、私はアルが大好き!」

ルイズは笑顔になってアルシオンの腕にしがみついて、ルンルン気分で部屋に戻っていった。

一方、小屋をプレゼントされたサイトはイスに座っていた。

「……何時までも落ち込んでられないな、よし! 今度こそ可愛い女の子をゲットしてみせるぞ!」

どうやら失恋から立ち直ったようで、新たな恋を求めようと決意し

たサイトだった。

※アルシオンとルイズと別れた後、サイトは一人、小屋で振られた事で大泣きしたのである。

失恋のサイト、新たな恋を探す決意をする（後書き）

次回はキュルケがアルシオンと出会います。

超イケメンの彼を気に入り、狙おうとする彼女は…

キュルケの陥落とその後（前書き）

ギリエロやり過ぎましたかね……指摘を受けたら修正をしようと思
います。

キュルケの陥落とその後

厨房で夕食を済ませ、今日から別々に生活する事になり、アルシオンとルイズは部屋に、サイトは譲り受けた小屋に戻った。

部屋の前に到着すると、ルイズは後ろから女の子に呼び止められた。

「ルイズ」

「あら、キュルケじゃない、何か用？」

声を掛けたのはキュルケだった。

「ルイズ、貴女昨日から食堂に来てないけど」

「ああ、その事ね。」

もう私はあの食堂で食事しない事にしたのよ。
今は厨房で済ませてるわ」

「厨房？冗談でしょ？」

「本当よ、もうあそこで食事しなくなったからね」

「貴女、一応貴族でしょ？しかもあのヴァリエール家の者が厨房なんかで食事するなんて、落ちたものね」

ルイズを笑いながらバカにする。

「なんとも言えばいいわ。」

確かに私は貴族だけど、もう私の心は平民よ。

私は貴族としてでなく、ただのルイズとして生きる事にしたのよ。貴族としての生き方はもう棄てたわ」

「!？」

ルイズの言葉にキュルケから侮蔑を込めた笑みが消えた。

以前のルイズなら侮辱されたら、言い返すのだが、どうも様子がおかしい。

しかも、バカにしても、ムツとした表情をせずに、平然とした顔でキュルケと話しているのだ。

それに今のルイズに余裕が感じられる。

何時ものツンツンした険しい表情から穏やかな表情に変わっており、そこから何か力強いモノが感じられる。

（この子……ホントにルイズかしら？前のルイズならちょっとからかったら突っ掛かってくるのに……）

キュルケは今のルイズに若干動揺した。

変貌しているの、驚くのは無理もないのだが、その原因は何なのか考えていると、ルイズの横に居るアルシオンに目が止まった。

「あら……スゴいい男じゃない、今まで見た事がない位ハンサムね……」

さっきまでルイズに夢中でアルシオンの存在を忘れていたキュルケは彼の類い稀な凛々しさに興味を持ち、変貌したルイズをそっちのけて、アルシオンに接近した。

「貴方、とってもステキね、お名前を聞いてもよろしくて？」

「アルシオンだ、よろしく、キュルケさん」

「フフ、私を知ってるのね？アルシオン…いい名前ね。
なら自己紹介するわ。

私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ、よろしく、アルシオン」

「ああ」

キュルケはアルシオンに自己紹介すると、彼女はゲルマニアの貴族でトリステイン魔法学院に留学生として入学し、二つ名は『微熱のキュルケ』で、火の魔法を得意とするトライアングル・メイジだと言う。

キュルケは「それじゃ♪」と二人に手を振って上機嫌になって、自分の部屋に戻っていった。

キュルケの中では別人となったルイズの事はどうでもよくなり、アルシオンに興味を持ち始めたようだ。

二人も部屋に戻り、ルイズはアルシオンに、キュルケには気を付けてと忠告した。

彼女は十代とは思えない程の美貌とスタイルで男子生徒をメロメロ

にしており、学院で何人かの恋人を抱え、女子生徒からかなりの反感を買っているそうだ。

しかも、ルイズとキュルケの家は先祖代々の深い因縁関係だそうだ。キュルケのツエルプストー家は代々、ルイズのラ・ヴァリエール家から恋人を奪い取った歴史があり、敵対していると言うが、この話はアルシオンにとってはバカらしくて、下らないモノである。

今のルイズも両家の因縁などどうでもいいモノである。

「アル、キュルケは絶対に貴方を狙ってくるわ、気を付けてね」

ルイズが心配そうにアルシオンに再度忠告し、彼は安心させるように彼女の頭を撫でた。

「心配するな、簡単に振り返り討ちにしてやるよ。」

確かにキュルケはかなりのやり手だが、大した事はない」

「そ、そう…まあ程々にしてあげてね」

「善処するよ」

アルシオンはキュルケが恋愛と快楽言う名の修羅場を潜り抜けた相当な猛者である事を卓越した洞察力で一目見て見抜き、キュルケが自分に近づいてきたら、彼女と同じやり方で相手してやるつもりである。

まずその準備運動に、ルイズを優しく抱き寄せた。

「あっ……」

いきなり、アルシオンから濃厚なキスをされ、ウットリしてしまい、そのままベッドに連れていかれ、抱かれる。

（キュルケ、来るなら来い、その時はお前の最期（性的な意味で）だ）

激しい情事の中でそう思うアルシオンである。

学院の連中が寝静まった夜、アルシオンはベッドから離れ、脱いだ服を着ると、情事で疲れたのか、可愛い寝息を立てて眠っているルイズの額に軽くキスして部屋を出ていった。

アルシオンが出ていくと、寝ていたはずのルイズが目を開け、ゆっくりと起き上がる。

「もう、アルったら…」

どうやら寝たフリをしていて、アルシオンを見送ったようだ。

出る間にキスされた額をソッと指先で撫で、微笑む。

「頑張ってね、私のご主人様…」

ルイズは愛するアルシオンにキスされた額を愛しく撫でるのだった。

事故鍛練しようとしてルイズの部屋を出て、外に出ようとしたら、キュルケの部屋のドアが開き、そこから大きなトカゲが出てきた。

キュルケの使い魔のサラマンダーのフレイムである。

フレイムはアルシオンに近づいていくと、「きゆるきゆる」と人懐っこい感じで鳴く。

「オレにこの部屋に入れと言ってるのか？」

フレイムはアルシオンの言葉を無視して、彼のズボンをくわえて、キュルケの部屋に引っ張ろうとしている。

「フッ、安心しろ。

部屋に入らせてもらうから、もう放せ」

フレイムはアルシオンにそう言われてくわえていたズボンを放した。

「いい子だ」

素直に言う事を聞いたフレイムの頭を撫で、気持ち良さそうにしている。

そしてキュルケの部屋に入ると、真っ暗でフレイムの周りだけ明るく光っている。

「ドアを閉めてくださる？」

暗がりからキュルケの声がしたので、アルシオンはドアを閉めた。

「待っていたわ、アルシオン」

「変わった招待だな。」

ゲルマニアの女はこんなふうにも男を誘うのか？」

「ウフフ……そうかも」

キュルケがパチンと指を鳴らすと、部屋に立てられた沢山のろうソクが一本ずつ灯っていき、暗くて見えなかったキュルケの姿がろうソクの火によって現われた。

何とキュルケの今の格好は男性を誘惑する為の下着を着けた悩ましい姿でベッドに座っていた。

「用件を聞こうか」

キュルケの下着姿に興味がないようで、用件を尋ねる。

「その前に、そこに立ってないでこっちにいらっしゃいな」

手招きしてアルシオンは無言でベッドに腰を下ろし、キュルケの隣に座った。

「……………」

キュルケはアルシオンをジッと見つめる。

「どうした？」

「ホントに貴方ってステキね……その端正な顔立ちに鋭い瞳、そして、鍛えぬかれたこの肉体……貴方を一目見た時に私の心が燃え上がったわ」

「それで？」

「恋したのよ、アルシオン、貴方に！」

「……………」

「私は「もういい」…えっ？」

呆れ顔でキュルケの言葉を中断させた。

「キュルケ、目的は何だ？簡潔に話してもらおうか。
何故お前は自分の使い魔でオレを此処に誘った？」

「だから私は貴方に恋「違うだろ？」……」

またしても言葉を遮られた。

キュルケが懲りずにアルシオンへの恋の話をしようとしたら、窓の外から一人の男が窓を叩きながら、キュルケの名前を呼ぶ。

「キュルケ！待ち合わせの時間に来ないと思ったら……それに誰だ？この男は！？」

男はアルシオンを睨み付け、キュルケに理由を尋ねた。

「ペリッソン！うーんと、二時間後にね」

「話が全く違うぞ、キュルケ！」

キュルケとルイズの部屋は三階であり、ペリッソンと言う男は魔法で浮いているようだ。

キュルケは胸の谷間から杖を取り出し、ペリッソンに向けて杖を振ると、ロウソクの火から大蛇みたいな炎が現れ、窓ごとペリッソンを吹き飛ばした。

「全く、無粋なフクロウなこと…」

「アレがフクロウか？人間の形をしたフクロウが此处に生息してるとは驚いたな」

「そうそう、そんな事より…」

キュルケがアルシオンにキスしようとする、彼はそれを制し、窓枠に指差し、彼女をその方向に向けさせた。

窓枠を見ると、そこに悲痛な表情の男が部屋を覗いていた。

アルシオンは彼の存在に直ぐに気付き、キュルケに指差しで教えたのだ。

「キュルケ……今夜は僕と……誰だよコイツは！？」

「ステイクス！えっと…四時間後に……」

「だからコイツは……」

怒りの表情で部屋に入ろうとしたら、再び杖を振り、ロウソクの火から炎が伸びだし、さっきのペリッソンのように吹き飛ばされ、地面に落ちていった。

「今のもフクロウか？」

再度呆れ顔で尋ねる。

「そうよ、フクロウなのよ、女の子の部屋に毎夜這いしようとするケダモノのようなものよ、さぁ続きを……」

キュルケが抱き付こうとすると、アルシオンはそれを躲し、再三窓枠に指差した。

躲されて、ベッドにダイブしたキュルケは指差された方を見ると、窓枠で三人の男達が押し合っていた。

「キュルケ！その男は誰だ！？恋人はいないって……」

「マニカン！エイジャックス！ギムリ！……えっと、六時間後に」

「「朝だよ！！」」

彼らは同時に唱和したが、キュルケは部屋の隅っこで寝ているフレームに命令し、起き上がり、彼らに向かって炎を吐き、それを受けた三人は地面に落ちていったのだった。

「……………」

ジト目でキュルケを見つめると、彼女は開き直ったように彼に近づいた。

「もう邪魔なフクロウは全部退治したわ……アルシオン、愛してるわ！」

キュルケはアルシオンの首に手を回し、キスをした。

『微熱』と名乗るだけあって、情熱的なキスだが、アルシオンはキュルケの腰に手を回し、強引に立ち上がらせ、そのまま熱いキスを交わす。

それから徐々に濃厚なキスを交わし、ハードなモノになっていき、キュルケの足がアルシオンのハードなキスによってますます力を失い、ガタガタと震え、とうとうアルシオンの唇から無意識に離れ、床に崩れるかのように膝をついた。

「ハア……ハア……ハア……………」

キュルケは恍惚とした表情でボーツとしながら甘い吐息を漏らし、口からだらしなく涎を垂らし、股下に水溜まりが出来ていた。

「どうする？まだ続けるか？それとも、もうやめるか？」

「……………ハア…………ア……ン…………」

アルシオンの声が聞こえていないのか、キュルケは艶やかな吐息を漏らし続けている。

「答える気力がないようだな、さて、そろそろトレーニングに行くか。

それじゃあな、キュルケ」

キュルケに背を向け、部屋を出ようとする。

「ま……………待つ……………て……………」

ありったけの気力を振り絞って、アルシオンを引き止める。

「何だ？」

キュルケの力のない声に足を止め、振り返る。

「い……………行かな……………いで……………」

普段のキュルケとは思えない懇願するような瞳でアルシオンを見つめた。

「キュルケ、何が望みだ？」

「……………抱いて……………私を……………メチャクチャに……………して……………」

「オレが抱いたら、もう後戻りが出来なくなるぞ？ お前もルイズと

同じ道を歩む事になる。
考え直すなら今の内だぞ」

「いいわよ……今直ぐに抱いてくれないと……死にそうなの……壊してもいいから……私を……好きにして……」

「後悔しないか？ 普段の自分に戻れなくなるんだぞ、それでもいいのか？」

「……………」

キュルケは無言で頷き、アルシオンは床に座り込んでいるキュルケを優しく抱き上げ、お姫様だっこしてベッドに寝かせた。

「キュルケ、お前もルイズ同様、オレのモノだ。
今からオレはお前を全てを奪う。
覚悟はいいな？」

「ええ……アルシオン……私を奪って……私は貴方のモノよ……」

二人は激しく、身を貪り合うのだった。

濃厚な情事によって、キュルケは気を失ったまま眠りについていて。ベッドには素っ裸でキュルケが一人で寝ており、情事の相手だったアルシオンは既に部屋から居なくなっていた。

どうやらトレーニングに向かっていったようだ。

そんなキュルケの部屋のドアが開き、小柄な女の子が入ってきた。

「キュルケ……」

満ち足りた表情でスヤスヤと寝息を立てているキュルケの頭を女の子は優しく撫でる。

「キュルケもアルのモノになったのね……私達は『姉妹』になったんだからこれからよろしくね、『キュルケ姉様』……」

キュルケを姉様と呟き、ベッドの傍に近くにあったイスを置き、桃色の髪の女の子がそのイスに座り、キュルケの手を握り、眠りついたのだった。

キュルケの陥落とその後（後書き）

次回はルイズとキュルケが姉妹の誓いを立て、愛しのアルシオンと町に行きます。

その町で面白い出会いが：

次は『晩年のルイズとその家族』を更新します。

サイトの相棒との出会い（前編）（前書き）

久しぶりに投稿しました。

リアル事情でなかなか執筆する時間が取れなくて…

こんな作品ですが、よろしくお願いしますね。

サイトの相棒との出会い（前編）

「ん……………」

朝になり、キュルケが目を覚ました。

身体を起こすと、自分が裸のままだった事に気付き、赤面する。

（そっか……私、アルシオンと……）

誘惑しようとしたが、結局は返り討ちにされ、激しい攻めにより、最後は失神してしまったのだ。

（彼ってスゴかったわね……思い出すだけで身体が熱くなっちゃうわ……）

昨夜の情事を思い出し、身体中が熱くなる。

（でも何だか不思議だわ。

分からないけど心が満たされてるような……あら？そこに居るのは……ルイズ！？）

今頃になってキュルケはベッドの傍で、イスに座ったまま、上半身をベッドに倒してスヤスヤと寝息を立てて眠っているルイズに気が付き、驚いた。

何故ルイズが自分の部屋に居るのか分からないが、キュルケはルイズを起こそうとせず、目を覚ますまで待つ事にした。

「ンンッ……」

ルイズが目を覚まし、片目を軽く擦ると、既に起きているキュルケに笑顔で「おはよう、キュルケ」と朝の挨拶をした。

「……………」

ルイズの朝の挨拶に何の返事もせず、ただジッとルイズを見つめる。

「キュルケ？」

「ルイズ……何時から私の部屋に？」

一番知りたい事を尋ねた。

「勝手に部屋に入ってゴメンね、キュルケ。」

アルにキュルケの傍に居てやれって言われて……」

「アル？それってアルシオンの事？」

「うん、実は……」

ルイズは戻ってきたアルシオンからキュルケの部屋に行って、彼女の傍に居るように頼まれた。

当然、ルイズがそれを引き受けると、アルシオンはトレーニングに

出ていった。

アルシオンを見送ると、彼に言われた通りにキュルケの部屋に向かい、ドアに鍵がかかっていたので、そのまま部屋に入ると、キュルケがベッドで気持ちよさそうに眠っていて、近くにあったイスをベッドの傍に移動し、それに座って眠るキュルケを見守り、自分も何時の間にか眠ってしまった事を話した。

「そうだったの……あの人が貴女にそんな事を……」

「うん」

ルイズの話を聞いて、キュルケはもう一つ聞きたい事を尋ねる。

「ルイズも彼と？」

キュルケの質問にルイズは真っ赤にしてゆっくりと頷いた。

「う、うん。」

アルに抱かれたわ……」

「彼はとうだった？」

「そ、そんなの言うまでもないでしょ!？」

「まあね、アルシオンって不思議な人ね。

あの人に抱かれたら何だか満たされたような……スッキリしたような感じがしたのよ。

何故かしら?」

「私もそう思うわ。」

アルに抱かれたら、何かに縛られたモノから解放された感じがしたのよ。

本当の自分を取り戻したような……」

「本当の自分ね……私もそうなのかな？」

「ええ、今のキュルケはとってもステキよ。」

これが貴女の本当の姿なのね」

「クスッ、ルイズも今までよりもっとステキよ」

二人は微笑み、抱き合った。

今まで家柄の事などでいがみ合っていた二人とは思えない光景だった。

「アルさん、此処は……」

「見て分からないか？ 街だよ」

「それは分かるんですけど、どうしてオレをこの街に連れてきたんですか？ しかも一瞬で……」

「それはお前に剣を買ってやる為だ。」

自分の身を守るには剣は欠かせんからな。

オレが剣を作って与えてもよかったが、『臨時収入』が入ったから、

街に出て買物もいだろうと思ってな。

オレの『瞬間移動』でサイトを連れてきた。
以上、何か他に質問は？」

「……ないっす」

「じゃあ行こうか」

街の門で力なく返事をしたサイトは街を歩こうとするアルシオンの後を追っていく。

サイトは朝起きた事から此処までの事を思い返した。

朝になって、ベッドから起き上がり、腹がへったので、朝飯をもらいに、厨房に行こうと小屋を出ようとしたら、いきなりアルシオンが中に入ってきたのだ。

「おはよう、サイト」

「ウワッ!? ア、アルさん! いきなり出てこないで下さいよ! ビックリしたじゃないっすか!」

「それは悪かった。

ところでサイト、今日はヒマか？」

「え? いきなり何ですか?」

「今日はヒマかと聞いたんだよ」

「まあ別に予定はないですけど……」

「そうか、なら今からオレと街に行くぞ」

「へ？」

「だから今からオレと二人で街に行くと行っただよ。
分かったら早く準備するんだ」

「は、はあ……」

サイトはアルシオンに言われて、出掛ける準備を始めた。

準備と言っても、水を汲んで、顔を洗って服を軽く整えるだけで済み、それが終わると、アルシオンに自分の近くに寄れと言われ、その通りに彼の近くに寄ると、サイトの視界がいきなりガラツと変わり、気付いたら、何処かの街の門前に居たのである。

突然の事で驚き、一瞬ボケーツとしてしまい、今に至る所まで思い返し、アルシオンと街を歩いているのである。

（今からメシ食いに行こうと思ってたのに……まあいいや、この世界の街に興味があるし、アルさんが剣を買ってくれるみたいだし）
好奇心が強く、ポジティブな性格であるサイトは気持ちを切り替えた。

アルシオンが朝食を奢ってくれるらしく、二人は適当な店に入り、

そこで食事を始めた。

サイトは食べ盛りなのか、運ばれた料理を気持ちよさそうに口に入れている。

余程腹がへっていたのだろう。

アルシオンはそんなサイトをヤレヤレと言った表情で見ている。

食後にお茶を飲んでいると、アルシオンはサイトに話し掛ける。

「なあ、サイト」

「何すか？」

「お前の居た世界は一体どのような所だ？」

「オレの世界はですね…」

サイトはお茶を飲みながら、自分の世界を話した。

サイトの話を聞いていると、アルシオンは彼の世界に興味を持ち始めた。

特にサイトの世界には魔法が存在していないと言う。

しかも貴族が居ないらしい。

そんな世界に自分も何時か行ってみたいと思うようになったが、アルシオンにはまだそんな力がないので、今は叶わないが、サイトの

為に何時の日か代行者の能力『異界転移』を取り戻し、サイトを故郷に連れて行こうと思った。

そして、サイトの世界に行きたい気持ちを胸にしまい、一息して、会計を済ませて、店を出た。

（サイトの世界か……何時かきつと行ってみせるぞ！）

アルシオンに一つの目標が生まれたのである。

「アルさん、この街って何て言う街ですか？」

「此処はブルドンネ街だ。

トリステインで最も大きい所だ」

「へ」

道端に数多の露店が並び溢れ、珍妙な商品が立ち並んでいる。

好奇心の強いサイトはそれらをじっくりと眺めまくり、アルシオンはそんなサイトを気が済むまで好きにさせたのだった。

露店を眺めていたサイトは満足したのか、アルシオンと再び街を歩き、色々な話をした。

ここら辺はスリが多いらしく、ちょっとでも気を抜くと直ぐに財布

などを盗まれると言う。

最もサイトは財布と言った貴重品を持っていないから大丈夫なのだが、金を所持しているのはアルシオンである。

そんな彼から財布を盗もうとする者がついさっき居たのだが、当然撃退されたのだった。

撃退したと言うよりも逆にスリから財布をスツたので、『臨時収入』を得たのだった。

街を行き交う人に武器屋の場所を聞き、教えてくれた人に礼を言つて、その武器屋に向かう。

狭い路地裏を通り、そこは悪臭が漂い、ゴミなどが散らばっていたが、アルシオンは平気だが、サイトはそれを我慢しながら、二人はそこを通り抜けると、目の前に剣の形をした看板を見つけた。

どうやら此処が武器屋のようだ。

二人は店に入ると店主らしき親父が「ん？」とつまらなそうにアルシオンとサイトを見つめた。

「おいおい、若い兄ちゃんに坊主。

此処はオメエらが来るトコじゃねえぞ、さっさと帰んな」

何とも失礼な物言いである。

サイトはそんな店主の態度にカチンときたが、アルシオンは彼を制し、回りを見渡した。

店主がアルシオンに何か言っているのだが、それをスルーし、棚にズラリと置いてある剣を見回すと、一本の剣に目を付けた。

その剣は錆がついてボロボロだが、アルシオンは笑みを浮かべてその剣に指を差した。

「よし、『お前』にしよう。

今から『お前』はサイトの相棒になってもらおう」

彼は一本の剣に指差して、何を言っているのだろうか？

サイトの相棒との出会い（前編）（後書き）

前話の後書きにかいた予告とは異なる話を書いてしまいました。

申し訳ありません。

次はデルフが購入されます。

サイトの相棒との出会い（後編）（前書き）

今回はめちゃくちゃ短くしました。

サイトの相棒との出会い（後編）

「ふざけんな！何でオレがテメエの指図で、この坊主の相棒になん
なきゃならねーんだ！？」

いきなりそのボロボロの剣に指差して、「サイトの相棒になれ」と
言ったアルシオンに、その剣から男の声で文句を言ってきた。

「しゃ、しゃべった！？剣がしゃべってるよ？」

言葉を話すこの剣に驚くサイトを無視し、アルシオンは話を続ける。

「お前がインテリジェンスソードだという事は一目見て分かったよ。
お前を買うから今日からサイトの剣として生活してくれ」

「なっ！！テメエ、勝手に決めんな！それにな……」

アルシオンと剣があだこうだと言いつ合っている、サイトが「
まあまあ二人ともそのくらいに」と彼らの間に入って、言い合いを
止めると、剣をまじまじと見つめた。

「お前、剣なのに言葉を話せるんだなービックリしたよ」

「ふん、オレ様を誰だと思ってやがる！」

「知らね」

「オレ様はデルフリンガー様だ！小僧、ジロジロ見てんじゃねえ！」

「オレは平賀才人。

よろしく、デルフリンガー」

サイトは何となく、デルフリンガーと言う剣を掴む。

「…………おめえもしかして『使い手』か？」

「何が？」

デルフリンガーが何か言おうとすると、アルシオンがそれを遮るように、先に「決まりだな」と言って店主に値段を聞く。

「百でいいぜ」

アルシオンは懷から金貨の入った袋を取り出し、それをカウンターに置くと、「おう、確かに」と金額を確認した店主はデルフリンガーを鞆に収め、アルシオンに渡した。

「コイツが喧しかったら、こんなふうに鞆に入れときゃ大人しくなるぜ」

店主のアドバイスにアルシオンは頷き、デルフリンガーをサイトに渡し、店を後にした。

「アルさん、ありがとうございます。」

オレに剣を買ってくれて」

「いいよ、それにお前はコイツで自分の身を守らなければならんからな」

「そうですね」

アルシオンは鞆から少しだけデルフリンガーを抜いた。

「デルフリンガー、サイトを守ってくれよ」

「へっ、何言ってやがる！コイツは『使い手』だから心配することたあねえよ」

「そうか、なら言い換えよう。」

サイトの相棒としてしっかりと支えてやってくれ」

「おう、任せな！今日から宜しくな、相棒！」

デルフリンガーはサイトを相棒と呼んだ。

「ああ、こっちこそ宜しくな、デルフリンガー！」

「デルフって呼んでくれや、相棒」

「ああ、デルフ」

サイトは頼れるパートナーで、三人目の友人を得たのだった。

そんな二人を優しく見守るアルシオンは『瞬間移動』で彼らと学院に戻っていった。

サイトの相棒との出会い（後編）（後書き）

今回はシエスタがモット伯爵に召し抱えられる話に入ります。

それを聞いたサイトは…

次は『晩年のルイズとその家族』を更新します。

タバサとの出会いと召し抱えられるシエスタ（前書き）

仕事休みだったので、頑張って執筆しました。

タバサとの出会いと召し抱えられるシエスタ

バキッ！ドガッ！

「グァ！」

「ギャッ！」

「ゲフッ！」

「い、痛い！」

深夜の女子寮の中庭で何やらケンカが起きている。

男五人がケンカしており、やられているのは四人の学院の男子生徒とその四人をたった一人でブチのめしている人物は：

「全く、お前らは手応えがないな。

杖がなきゃ何も出来んとはホントに情けないな」

長身で青白い髪と瞳の男性…アルシオンだった。

彼はこの四人に中庭に呼び出され、四人はアルシオンを袋叩き後に始末しようとしたが、あっさりと返り討ちにしたのだ。

何故こんな事になったのか、それは夕方の事だった。

デルフリンガーを購入し、『瞬間移動』で学院に帰ったアルシオンとサイトは厨房で別れ、ルイズの部屋に帰ろうとしたら、四人の男子生徒に声を掛けられた。

「おい、その平民！」

「……………」

無視してルイズの部屋に向かおうとすると、声を掛けた男子生徒が無視されて怒りの声を上げた。

「待てと言ってるだろうが！平民の分際でこのボクを無視するんじゃない！」

四人組のリーダーらしき生徒が顔を怒りで真っ赤にして大声を上げ、面倒臭そうに振り向いた。

「喧しい、親の力無しじゃ何も出来ない小僧が何喚いてるんだ？みっともないぞ」

「「「な、何！？」「」」」

生徒達はアルシオンの言葉に同時にハモった。

「平民のくせに貴族のボクにそんな言葉を……いい度胸だな！」

「全くだ！今此処でボク達の力を思い知らせてやろうか？」

「許さない！薄汚い平民が！」

「平民がキュルケの部屋に居た事を許せないが、いまの暴言で益々許せなくなったよ！平民、覚悟はいいだろうな！？」

そう、彼らはキュルケの元彼氏（？）だったのだ。

昨夜、キュルケとデートするはずだったが、部屋の外で彼女に撃退されたのが、この四人組である。

もう一人居たが、この場に居ないようだ。

「何だ？オレにケンカ売るのか？いいだろう、今この場で相手してやるぜ」

四人組に対してニヤリと笑うアルシオンにリーダーの生徒が鼻で「フン」と笑う。

「口の聞き方がなってないが、まあいい。
今夜中庭に来い！ボク達を恐れて逃げたいのなら逃げて構わないよ」

「その代わり、君とさっきまで一緒に居たあの平民に君の代わりを
してもらおうよ」

「そういう事」

「ならいつその事、二人一緒でもいいんじゃないか？」

四人が一斉に笑いだすと、アルシオンがリーダーの首をガシツと素早く片手で掴み、徐々に締め付けた。

「誇り高い貴族がそんな汚い手を使うとはな。
いいだろう、貴様ら、そこで待ってろ。
たっぷりと遊んでやるよ」

「ウガッ……は、放……せ………」

首を力強く絞められ、リーダーが窒息寸前である。

「ス、スティックス！」

「おい、お前！スティックスを放せ！」

「ヒッ！は……放せ！」

三人はアルシオンに怯えながら、スティックスと呼ばれた生徒を放せと訴え、スティックスは投げ飛ばされ、解放された。

「クッ……よ、よくもボクにこんな事を！今殺してやる！」

頭に血が上り、スティックスが懷から杖を引き抜こうとすると、仲間一人がそれを制した。

「よせ、スティックス！コルベール先生が来たぞ！」

教師のコルベールが近づいている事に気付いた彼は慌てスティックスを抑えたのだ。

「チッ！命拾いしたな、平民。
今夜必ず来いよ！さもないとあの平民がどうなるか……分かるよな？」

「とっとと失せろ。」

食堂で最後の晩餐会でもやるんだな」

アルシオンはスティックス達を地獄に突き落とす気になり、そんな言葉を彼らに伝える。

「それはこっちのセリフだ、行くぞ、ペリッソン、マニカン、エイジャックス！」

スティックスの言葉に頷いた三人はコルベールが来る前に退散していった。

「むむ？アルシオン君、あの生徒達と何かあったのかね？」

「いえ、何でもありません」

コルベールの問いに誤魔化して返事をして、色々と聞かれたが、適当に答えてコルベールと別れた。

ルイズの部屋に戻ると、そこにルイズとキュルケがアルシオンを待っていたらしく、二人の少女は何も言わずに彼を暖かく迎え、他愛ない話をした後に厨房に食事をしに向かい、夕食をとったが、シエスタの様子が何故かおかしかった。

シエスタ以外のマルトー達も彼女同様に表情が暗く、何かあったのかと聞いても「何でもない」と返事され、アルシオンもこれ以上追及する気はないので、質問を止め、食事が終わると、三人は厨房を出ていった。

部屋に帰る最中にアルシオンは厨房の連中の事を考える。

（厨房のみんなの様子がおかしかったな。

あの落ち込みようは貴族絡みか？特にシエスタの様子がかなり変だった。

あの子の目は絶望に満ちた目だった。

よし、アイツらを始末したら、シエスタに詳しい事を聞こう）

自分とサイトの事で、厨房の連中とシエスタには何かと世話になっているので、彼女を助けようと心の中で決め、ステイックス達を速やかに片付けて、シエスタに会って話を聞こうと決めたのだった。

約束の時間になり、先程まで部屋で他愛ない話をしていたキュルケを部屋に帰し、ルイズを寝かせると、ステイックス達の待つ中庭に向かった。

そこにステイックス達が杖を構えて、アルシオンを待ち構えていた。

「よく逃げずに来たな、平民。

誉めてやろう」

「悪いが急用が出来たから、お前らと遊ぶ暇がなくなった。

だから早めに片付けさせてもらおう」

「何を言ってる……」

ステイックスの言葉が続く事はなく、アルシオンは一瞬で四人の杖を取り上げ、四本の杖をギュッと握るとボキッ！と音を立てて折った。

「「「なっ!!」」「」」

四人は驚いたが、アルシオンは速攻で彼らを一人ずつ殴り飛ばして今に至るのだった。

「色々お前達にゆっくりと言いたい事があったが、時間が惜しいから此処で一言言って終わりにする。

生き地獄を味わえ!」

アルシオンの両目からピカッと青白い光が放たれ、それを受けた四人は目を開けたまま失神した。

彼らは目覚めた時には生き地獄を味わう生活が始まるのだ。

寿命を全うするまで…。

そんな彼らを一瞥し、シエスタの元に向かうと、途中に大きな杖を持った小柄な青髪の少女が立ちふさがった。

「貴方…あの四人に何を？」

「……………」

少女に目もくれずにそのまま彼女の横を通り過ぎた。

少女の存在に気付いていたが、今は相手する気も暇もないので、無

視したのだった。

「……………」

無視された少女は無言と無表情でそのままアルシオンの後ろ姿を見送った。

使用人の寮に到着し、シエスタの同僚らしき数人のメイドが寮に入ろうとすると、アルシオンは彼女ら呼び止めた。

「こんな時間にすみませんが、シエスタを見ませんでしたか？もし此処に居たら、彼女を呼んでくれませんか？」

「……あの子に何の用があるんですか？」

アルシオンは厨房でシエスタ達の様子がおかしかった事を説明すると、メイド達は暗い表情になった。

「シエスタの事は…そつとしてあげて下さい。
私達平民じゃどうしようもない事だから……」

「どうしようもない事？それは一体？」

「帰って下さい……これ以上話す事はありませんから……」

暗い表情のメイド達はアルシオンとの話を切り上げ、逃げるように

寮に入っていった。

「……………」

ポツンと一人取り残され、「ハア……」とため息をつき、仕方なく、部屋に戻る事にした。

（やれやれ、明日、シエスタを捕まえて詳しい話を聞くとしよう）

女子寮に戻ろうとすると、アルシオンが無視した少女が目の前に立っていた。

「もう用事は済んだ？」

「オレに何の用だ？」

「貴方はあの四人に何をしたの？」

「知ってどうする？」

「貴方は何者？ただの平民ではないのは間違いないけれど……」

「オレが何者だろうが、君に何の関係がある？今更だが君は誰だ？」

「タバサ……」

タバサと言う少女はそう名乗った。

「オレはアルシオンだ。」

それで、そのタバサがオレに何の用だ？」

タバサが名乗ったので、アルシオンも名乗り、用件を尋ねた。

「アルシオン……私は貴方から凄い力を感じる……貴方を見込んでお願いがある」

「……どうしてそう思うんだ？別にオレ以外の他に凄い奴はゴロゴロ居るだろ？ソイツらに頼めばいいだろう？」

「あのルイズと……キュルケをモノにした貴方の方がいい。貴方の事、調べさせてもらった」

「ほお、ルイズとキュルケとの事を調べたのか？」

「……………」

タバサは無言で頷いた。

「あの二人の身も心をモノにし、変貌させた貴方の手腕は相当な物。そして、小物とはいえ、あの四人をあっさりと倒したその戦闘力も言うまでもない……だから、私に力を貸してほしい……」

「……………」

「報酬は幾らでも用意する。だから……」

「待て」

「？」

タバサの言葉を遮った。

「悪いがその話は後にしてくれないか？今は大事な用事があるんでね。

それが済んだらお前の話を聞こう。

じゃあな」

シエスタの件を優先する為、タバサの話を後回しにして、この場を去ろうとすると、タバサが「待って」と言って引き止めた。

「その用事って此処で働いているメイドの事？」

「知ってるのか？」

「詳しい事は分からない……今日、学院に来た何処かの伯爵が黒髪のメイドを気に入って、明日からそのメイドがあそこに仕える事になったと聞いたけど？」

「！」

「どうしたの？」

「そうか……そういう事か」

「？」

タバサの話でシエスタ達の様子がおかしかった理由が明らかになった。

シエスタはおそらく、学院に來た名前の知らない伯爵とやらに見初められ、強制的に仕える事になったらしい。

後でその伯爵の素性をルイズの知識を使って調べる事にして、明日からシエスタを救出しようと決めた。

「タバサ、助かったよ。

お礼にその一件が片付いたら、お前の話を聞こう」

「分かった。

それが終わったら、私の話を聞いて……」

「ああ、約束する」

アルシオンはシエスタの件が済んだら、タバサの話を聞く約束をして、二人はそこで別れた。

（シエスタ、必ず助けてやるからな！さて、その伯爵とは誰だろうな？）

ルイズの知識を使って、帰りながら調べるのだった。

タバサとの出会いと召し抱えられるシエスタ（後書き）

次回はモット伯爵にアルシオンが裁きを下し、シエスタを救います。

絶望のモットと無謀のサイト（前書き）

久しぶりに頑張って、5ページ書きました。

絶望のモットと無謀のサイト

翌朝、ルイズとキュルケを連れて、厨房で朝食をとりに行くと、やはりシエスタの姿はなかった。

昨夜、タバサから話を聞いたアルシオンは知らないフリして、手の開いているメイドを捕まえて、シエスタはどうしたのかと尋ねた。

「……シエスタはモット伯爵に召し抱えられました」

呟くように答えた。

早朝に、シエスタは学院で働く使用人達に別れの挨拶して、迎えに来たモット伯爵の馬車に乗って学院を後にしたそうだ。

「そうか」

「「……………」」

ルイズとキュルケは黙って食事をしたが、申し訳ない気持ちになったのか、出された食事の半分も口に入れずに食べるのを止めた。

三人は厨房を出て、無言のまま、校舎の出入口まで歩き、授業があるので、そこで別れた。

二人と別れ、アルシオンは昨日、ルイズの知識を使って、モット伯爵の事を調べたが、彼女はあまり彼の事を詳しく知らないらしい。

ジュール・ド・モット伯爵。

王宮の幹部クラスらしいと言う程度しか分らなかったのだ。

（仕方ない、聞き込みとかして、モットの居場所を探すとするか）

学院を出て、街の人達に話を聞く事にした。

校門に差し掛かろうとすると、そこにタバサが門の壁に寄り掛かって、本を読んでいた。

眼中にないので、アルシオンはタバサをスルーして、校門を通ろうとすると、彼女は「何処に行くの？」と声を掛け、引き止めた。

「モットの居場所を見つけに行くんだよ。」

それよりお前は此処で何してるんだ？授業はいいのか？」

「私に授業はあまり必要ない。

修得すべき単位は全て取ったから」

「そうか、お前はかなりの優等生なんだな」

「……………」

「もう行くよ」

今のところ、彼女に用がないので、タバサに手を振って学院を出ようとする、再度引き止められた。

「今度は何だ？」

普通の人ならこんなにしつこい和大抵、イライラするのだが、アルシオンは普通の表情で用件を聞いた。

「私はそのモット伯爵の居場所を知っている……良かったら教える……」

「最初からそう言ってくれよ……ん？待て。

お前、どうして奴を知ってるんだ？昨日は伯爵って名前しか知らないと言ったろ？」

もつともである。

昨夜、タバサがモット伯爵を何処かの伯爵しか知らないと言っていた彼女は今になって、名前と居場所を知っているとアルシオンに告げたのだ。

「お前、隠していた……訳じゃなさそうだな」

タバサはコクンと頷いた。

「貴方と別れた後に、直ぐにモット伯爵の事を調べたの。

時間がなかったから、全てを調べられなかったけど、彼の最低限の事だけは分かったから。

これがその資料のような物」

タバサは少し大きめなメモをアルシオンに渡した。

メモを受け取り、目を通してみると、モット伯爵のフルネームと住所と役職と人物像が細かく文章で記されていた。

「タバサ、よく調べてくれたな。
ありがとうって言いたいけど、どうしてオレにここまでしてくれるんだ？」

調べてくれたタバサに感謝しつつ、理由を聞く。

「貴方に早く『仕事』を済ませてほしいから。
その後に私の頼みを聞いてほしいから……だからこれを持って早くモット伯爵からシエスタを救って……」

「ああ、シエスタはオレが必ず助けだす。
それが終わったら、礼をさせてもらうよ」

「期待してる」

無表情のタバサがゆっくりと微笑んだ。

アルシオンもそれに応えるようにニコツと微笑むとタバサが一瞬、赤面した。

「い、言うまでもないけど、気を付けて……ゆ、油断は禁物！」

動揺しながら、気を引き締めるよう注意する。

「分かってるよ、じゃ！」

再び手を振ってタバサに背を向け、学院を出ていった。

タバサはアルシオンの姿が見えなくなるまで、胸に手を当てて見送った。

（胸がドキドキしている……これは何？ 病気……じゃないのは確かだけれど……）

彼女がこの鼓動の原因を知るのはまだ先の事である。

「此処がモットの屋敷か」

トリスタニアに到着したアルシオンはタバサのメモを頼り、モット伯爵の屋敷を探し、直ぐに見つかった。

因みに彼は『瞬間移動』を使って来たのだ。

タバサと別れた後に時間をムダにしたくないので、『瞬間移動』を使ったのだ。

直ぐに屋敷に乗り込んで、シエスタを連れ出してもいいだろうと思ったが、そんな事をしたら、モット伯爵が学院の使用人、若しくはシエスタの家族に何らかの危害を加える可能性があると考え、取り敢えず、突入は見送り、街の周辺で情報収集を行う事にした。

聞き込みなどして、モット伯爵に関する事が徐々に明らかになった。

モット伯爵は王宮でそれなりの要職についており、今朝、彼の乗った馬車が勤務で城に向かっていった事。

当然だが、平民からの評判が凄く悪い事。

これは別に珍しい事ではないが、彼は非常に女グセが悪く、気に入った平民の若い娘を強引に召し抱えているらしく、自分より身分の低い貴族の娘も気に入れば召し抱えるらしい事。

最後は慰み者にされ、飽きたらゴミのように捨てられ、彼女らの人生を滅茶苦茶にし、中には子供を身籠ったり、精神を壊され、自殺した者も少なくない事。

この得た情報は全てタバサのメモに書いてあった通りだった。

別にタバサを疑う訳ではないが、アルシオンはメモの内容を情報収集して試したのである。

その結果、情報とタバサのメモの内容がピッタリと一致したのだった。

（モットの情報を得たし、今夜にでも決行しよう。

一旦学院に戻るか）

アルシオンは一目のない裏路地に向かい、『瞬間移動』で学院に戻っていった。

学院に戻り、森の適当な場所に直接向かい、自己鍛練して夜まで時間を潰し、シエスタを助けに行こうとしたら、三人の少女がアルシオンの元に駆け付けた。

「アル、大変よ！」

「不味い事になったわ！」

「サ、サイトさんが……」

ルイズとキュルケと、もう一人は厨房で働いている知らないメイドの三人が思い詰めた表情でやってきたのだ。

「どうしたんだ？ サイトがどうかしたのか？」

「そ、それが……」

ルイズが事の起こりをアルシオンに話した。

サイトがちよっと遅めの朝食をもらいに厨房に来たが、シエスタの姿が見えないので、メイドに聞いたら、シエスタがモット伯爵に強制的に召し抱えられたと聞いて、食事をとらずに厨房を飛び出したそうだ。

サイトにその話をしたメイドは急に胸騒ぎがして、アルシオン（その時はトリスタニアに居た）を探したが見つからず、夕方になって、ルイズとキュルケが厨房に向かっていてところを見かけ、二人に事情を話して、三人でアルシオンを探していたのである。

「……おそらく、サイトはシエスタを助けに行っただろう。
全く、相変わらず世話の焼ける奴だ」

アルシオンは内心、舌打ちして、シエスタとサイトの救出に向かうとしたら、ルイズ達が自分達も行くと同行を彼に願いだしたが、彼女らは部屋で待つように言い聞かせ、三人はアルシオンがそう言うならと、仕方なく従い、『瞬間移動』でモット伯爵の屋敷に向かっていった。

モット邸に到着すると、そこは門から門番までボロボロになっており、ありとあらゆる建造物が破壊され、門番達は倒れているが、死んではいないらしく、気を失っただけのようだ。

どうやらこれはサイトがやったようで、この状況で、今のところ、アルシオンの邪魔をする者が居ないので、倒れた門番達を一瞥し、彼は開いたままの屋敷の門を通り、中に入っていた。

とある私室にて

「フン、バカな小僧だ！この私に齒向かうとは命知らずもいいところだ」

「サ、サイトさん！しっかりして下さい！！」

ボロボロになって気を失ったサイトをシエスタが揺さ振ったが、返事をしない。

サイトを叩きのめしたらしい男はサイトを思い切り蹴って、シエスタの腕を乱暴に掴み、ベッドに押し倒した。

「キャッ！」

「とんだ邪魔が入ったが、まあよからう、今からお前の身体をタツプリと味わってやろう！グフフフ……！！」

男は下品な笑い声を上げ、シエスタに迫ろうとする。

「い、嫌！や、止めて！た、助けて、アルさん！助けて！！」

無意識にアルシオンの名前を叫んだが、男は気にも止めない。

「助けを呼んでどうする？誰も此処には来ないわ！」

「来てるんだよな、それが」

「！！」

男はいきなり声がした方向を驚いて振り向こうとしたら、何者かに

首を力強く掴まれ、ベッドから引き摺り降ろされた。

「ア、アルさん！」

アルシオンだった。

「シエスタ、迎えに来たぞ」

「えっ？」

「直ぐに済ませるからちよつと待ってくれ」

シエスタから男に振り向き、男の正面から再び首を締め上げる。

「ウガガガ……き、貴様……！この私にこんな事をして……タダで済むと思っているのか？」

「黙れ、モット。」

テメエ、シエスタのような娘達を権力を使って召し抱え、サイトをこんな目にあわせやがって！貴様には死すら生温い」

「だ、黙れ！わ、私はモット伯爵だぞ………！わ、私が……その気に……なれば……き、貴様らを……直ぐにでも処刑……だって……出るの……だぞ……？」

首を絞められた状態でもアルシオンを脅すモット伯爵はある意味大した男であるが、その脅しは通用しない。

「安心しろ、地獄に落ちるのはモット、貴様だよ」

すると、モット伯爵の身体中が強烈な電流が流れ、彼は悲鳴を上げた。

「ギャアアアアッ！！！」

「どうだ？電気のお味はいかがですか？モット伯爵？」

電流によって苦しめられ、返事が出来ず、ただ苦痛による悲鳴を上げるだけだった。

「た、助け……て……」

モット伯爵が電流による苦痛に耐えきれず、アルシオンに命乞いした。

「ああ、『命だけ』は助けてやるよ。
命だけはね……」

アルシオンは両目から青白い光を放ち、それを受けたモットは意識を失い、アルシオンのモット伯爵の首を掴んだ手を放すと、彼は床に倒れた。

「モット、お前もあのスティックス達と同様に死ぬまで罪を償い続けながら生きるがいい」

倒れたモットに背を向け、シエスタに歩み寄る。

「大丈夫か？」

「は、はい！……でもアルさん、こんなことして大丈夫なんでしょ

うか？」

「心配しなくていいよ。

このクズは目覚めた時から地獄を味わう生活が始まる。

シエスタには迷惑をかけないよ。

だから、オレを信じてくれ」

「はい、私はアルさんを信じています」

「よし、とつととサイトを治療したら、学院に帰るとするか！」

「はい！」

シエスタに帰りの準備をしてもらっている間に、ボロボロのサイトの治癒を始め、シエスタの準備が終わった頃にはサイトは完治したが、彼は相変わらず気持ちよさそうに眠っていた。

（全く、コイツは……ん？サイトの奴、デルフを持ってこなかったのか？デルフを持たずに屋敷に突っ込んだのか！？）

サイトの無謀と言うか無鉄砲さに呆れ、ため息をついた。

「サイトさん、治ったんですね……ってアルさんどうしたんですか？疲れたような顔して……」

「大丈夫だ、さあ帰るか」

「……………」

「シエスタ？」

シエスタはどうしても聞きたい事をアルシオンに尋ねた。

「アルさん、どうして私を助けてくれたんですか？下手したらアルさんも酷い目にあうかもしれないのに……」

シエスタの問いにアルシオンは笑顔になり、それを見たシエスタは赤面したが、彼はそれに構わず返事する。

「シエスタはオレとサイトの恩人だからだよ」

「えっ！？わ、私がお二人の……？」

「ああ、君はオレ達によくしてくれた。

特にサイトの食事を毎日用意してくれた。

シエスタやマルトーさん達はそんなオレ達を暖かく迎えてくれて、貴族であるルイズやキュルケにもよくしてくれた」

「そんな……私達は同じ平民としてお二人を……」

「例えそうでも、君達はオレ達を人として接してくれた事に変わりはない。

だからオレはシエスタを助けたかったんだ。

……このサイトもきつとオレと同じ気持ちで君を助けにきたんだろう」

「アルさん……」

「さあ、この話はこれでおしまいにして、早く帰ろう」

シエスタは頷き、アルシオンはサイトを肩に担いで、『瞬間移動』

で学院に帰っていった。

学院に戻り、シエスタの身を案じていたマルトー達使用人達にシエスタが会いに行くと、使用人達はシエスタの無事を声を上げて大喜びした。

意識が戻ったサイトはアルシオンとルイズに無謀過ぎると、こつてりと絞られ、後で来たシエスタに「心配したんですよ!」と凄い勢いで怒られたのだった。

その頃、サイトの小屋の中にて、ベッドの横に立て掛けてある剣デルフリンガーはブツブツと何か呟いていた。

「おゝゝい、相棒ゝゝ! オレを置いて何処に行っただよゝゝ!」

寂しがっていたのだった。

絶望のモットと無謀のサイト（後書き）

あくまで予定ですが、次回はモット伯爵の地獄の生活を挿話で出そうかなと考えています。

あくまで予定ですけど（笑）

次は『晩年のルイズとその家族』を更新します。

挿話 自由を奪われた好色伯爵と新たな愛に目覚めた王妃（前書き）

オハヨウゴザイマス！ 久し振りに投稿します。

挿話 自由を奪われた好色伯爵と新たな愛に目覚めた王妃

「ウツ……」

屋敷の自室の床で俯せの状態で倒れていたモット伯爵は意識を取り戻し、ムクリと起き上がった。

「?……私は何故、此処で寝ていたのだ?………思い出せんない……」

記憶を失っているのか、魔法学院で見初めたメイドのシエスタと殴り込んできたサイト、そしてその二人を取り戻しに来たアルシオンの事をモット伯爵はきれいさっぱり忘れていた。

アルシオンによって記憶を消去されたようだ。

アルシオンはモット伯爵だけでなく、屋敷に仕える使用人全ての者達の記憶を操作し、アルシオン達とそれに関係する事情を消去したのである。

「まあよい、何か引っ掛かっているような気がするが……もう遅いから寝るとしよう」

モット伯爵は目の前のベッドに向かおうとすると、いきなり身体が金縛りにあったように硬直した。

「なっ!!?」

一瞬、戸惑うが、彼は自分の意志とは関係なく、衣服を全て脱ぎ、

クローゼットの中から適当なマントを取り出し、裸体を隠すように包み込むと、そのまま部屋を飛び出し、屋敷を出ていった。

（わ、私は一体何をしているのだ！？な、何故身体が勝手に！！？）

自分の意志とは関係なく、モット伯爵はその場から姿を消した。

深夜、トリステイン城内に黒いマントで身を包んだ怪しい侵入者が誰にも気付かれずに、ある部屋を目指して、音を立てずに接近していた。

その侵入者が部屋の前に止まり、ノックもせずにドアを開けた。

この広くて豪華な部屋はこのトリステインの王族が使用しているように、奥にあるベッドに誰かが眠っているようだ。

侵入者がベッドに近づくと、そこには、多少中年だが、高貴な感じで美しい女性が眠っていた。

（ど、どうして私が城内に侵入し、し、しかもマリアンヌ王妃の部屋に！！こんな事がバレたら、爵位を剥奪されるだけでは済まなぞ！）

一国の王妃に手を出せば、爵位を剥奪されて家を取り潰され、良くて国外追放か、最悪、処刑の可能性大である。

モット伯爵のそんな思いに関わらず、己の身体が眠るマリアンヌ王妃のベッドにゆっくりと接近していた。

そして、彼はベッドの上に上がり込み、マリアンヌ王妃の美しい寝顔に近付いていく。

「……………」

（う、美しい……………ハッ！わ、私は何をしているのだ！？早くベッドから離れなくては！）

若い女性にしか興味がなく、美女とは言え、年増にそれほど興味がないモット伯爵はマリアンヌ王妃の美しさに一瞬見惚れてしまったが、慌ててベッドから離れようとしたが、彼の意志では勝手に動く自分の身体をコントロール出来ない。

それでも抗おうとしていると、マリアンヌ王妃が人の気配を感じたのか、とうとう眠りから覚めてしまった。

「……………」

寝惚けているのか、マリアンヌ王妃はボケーツとしており、モット伯爵は無言で彼女を見つめている。

しかも、お互いに顔と顔が急接近しているのだ。

暫くすると、意識がハッキリとしたマリアンヌ王妃が目の前のモット伯爵の気持ち悪い中年顔に驚愕する。

「キ……キャー……!! な、何者ですか!!?」

ドアップでモット伯爵を見たマリアンヌ王妃が思い切り悲鳴をあげ、彼の心は絶望に染まった。

（終わった………何もかも、全てが……私はもうおしまいだ……）

とうとう自分の人生が終わったと、そんな心境に関係なく、モット伯爵の口から言葉が出る。

「フッ、王族としての義務を放置し、平民達からの税でこのうと生活している悪い子にちょっとキツイお仕置きをしに来たのさ」

キモい笑顔でビシッとマリアンヌ王妃に指を差し、キザでダンディな口調でウィンクするが、全然似合わない上に気色悪い。

そんなモット伯爵にマリアンヌ王妃はドン引きしつつ、反論する。

「し、侵入者が何を言っているのですか!? ……あ、貴方はモット伯爵ではありませんか! どうして私の部屋に居るのですか!? このような時間に、この所業が許されると思っているのですか!? 早々に立ち去るのです!」

侵入者がモット伯爵だと確認したマリアンヌ王妃が部屋から出ていけと命じたが、彼は無視した。

「出ていかないと城の者達が此方に駆け付けますよ!」

それでも笑みを浮かべ、似合わない口調で話し掛ける。

「それは無理だな。

この部屋にサイレントを掛けてあるから誰も来ないよ」

「そ、そんな……」

「だから、どんなに大声あげても誰も来やしないよ」

「……………」

マリアンヌ王妃は絶句した。

モット伯爵はこの部屋に侵入後に誰にも邪魔されないよう、予めサイレントをかけていたのだ。

言うまでもないが、モット伯爵の意志ではなく、身体が勝手に魔法をかけたのである。

「お喋りはおしまいだ。

さあ、そろそろお仕置きを始めようか。

」

相変わらず似合わない渋い口調で優しくマリアンヌ王妃を押し倒し、仰向けにさせた。

「あ…あああ……」

これから何をされるのか、頭の中が恐怖でいっぱいのマリアンヌ王

妃はモット伯爵の言葉が聞こえていない。

そんな不安顔のマリアンヌ王妃にモット伯爵は顔に似合わない、優しい笑みを浮かべた。

「そんなに怖がらないで、別に痛い事をする訳じゃないんだから」

「え？」

戸惑うマリアンヌ王妃にモット伯爵は強引にキスをし、衣服であるたった一枚のマントを脱ぎ捨て、素っ裸になり、マリアンヌ王妃の豊満な肉体をまさぐると、彼女が叫びながら抵抗し、暴れだすが、サイレントのかかった部屋で大声を出しても外に聞こえないので当然、誰も助けに来るはずがなく、精一杯抵抗しても、男女の力の差があつてモット伯爵には通用しなかった。

モット伯爵はマリアンヌ王妃の両手を押さえ、彼女が大人しくなるまで待つのだった。

長い時間に叫び、暴れ続けていたマリアンヌ王妃がやっと大人しくなった。

どんなに抗ってもムダだと悟ったらしく、諦めた表情になった。

「私を……どうする気ですか？」

「言っただろう？王族としての義務を放置しているいけない君に私の愛でお仕置きをするってね」

モット伯爵はマリアンヌ王妃の言葉を待たずに、無抵抗の彼女のネグリジェを脱がせ、お互いに素っ裸になると、彼は一国の王妃の高貴で美しい肉体と重ねるのだった。

早朝近くまで激しい情事続けた二人はまるで恋人同士のようにベッドで抱き合っていた。

モット伯爵はともかく、さっきまで絶望に満ちた表情だったマリアンヌ王妃の今の表情を見ると、顔の肌がツヤツヤしており、満足な、幸せそうな顔をしている。

「モット様……」

マリアンヌ王妃はモット伯爵を様付けで呼ぶと、彼はそれに応えるように微笑んだ。

「何だい？マリアンヌ」

「とてもステキでしたわ。」

私はこのような激しい事初めてでした」

「そうなのかい？」

「はい、アンリエッタを産んでから、あの人は私に一切構ってくだ
さいませんでしたから……」

マリアンヌ王妃は亡き夫である先王が十数年もの間、自分に構って
くれなくて欲求不満だった事、夫に抱いてほしいと言えなくて時々、
一人で自分を慰めていた事、その夫が亡くなり、女王に即位するは
ずだったが、その責務を果す自信がなくてそれを拒否した事を話し
た。

「貴方が仰る通り、私は夫の喪に服すと言う理由で、王族としての
義務から逃げていたのかもしれませんが……ですが、私は怖いの
です。」

私などに女王が務まるのでしょうか？自信がないのです……」

モット伯爵は自嘲気味のマリアンヌ王妃に優しくキスをすると、彼
女もそれを受け入れ、徐々に濃厚なモノになり、再び激しく交わっ
た。

深夜から陽が昇りかけまで何回目か分からないほど情事を重ね、マ
リアンヌ王妃の身体が流石に限界を感じ、ぐったりしてしまい、息
を切らしている。

「も、もう無理ですわ……身体がもちません……モット様、貴方は
凄すぎますわ……」

モット伯爵の巧みな性技と凄まじい腰使いで数え切れないほど絶頂

に達し、失神を繰り返し、メロメロにされたマリアンヌ王妃はウツトリした表情で彼を見詰める。

マリアンヌ王妃の目にはモット伯爵が精悍な顔つきで、頼り甲斐のある逞しい身体をしている美中年に見えているが、実物は変態顔で、腹がボツコリ出ている中年男性である。

最初は部屋に侵入してきたモット伯爵をゴミのように見ていたのに、欲求不満だったとは言え、身体を重ね、結果的に満足してしまい、それがきっかけで、モット伯爵に惚れてしまったのだ。

マリアンヌ王妃は意外と単純かもしれない。

「大丈夫、マリアンヌ、君なら出来るよ。
私がついているから心配しないで」

「ですが……」

「私が君を支えてあげるから、トリステインの為に頑張ろう！
そして私がマリアンヌを満たしてあげるよ」

「モット様……」

「もっと自信を持つんだ。
困った時は私が何時でも助けてあげるよ。
だから、ね？」

「……はい、私は女王になります！王族としての義務を、責務を最後まで全うしてみせますわ！……だからモット様、私の側に居て下さいまし……」

「勿論だよ、マリアンヌ！ずっと君の傍に居るよ」

「ああ……モット様、お慕いしておりますわ」

「マリアンヌ、愛しているよ」

モット伯爵はメロメロ状態のマリアンヌ王妃を抱きしめたのだった。

（わ、私はなんて事を！王妃にあんな事やこんな事をして、しかもあんなセリフを言うてしまうとは……）

夜が明け、トリステイン城を抜け出し、無事に屋敷に戻ったモット伯爵は自室でマリアンヌ王妃との事を思い返していた。

自分の意志とは関係なく、口と身体が勝手に動き出し、トリステインの王妃に夜這いをしてしまい、今まで召し抱えた女性で培ったハイレベルな性技と並々ならぬ自慢の下半身でマリアンヌ王妃を虜にしてみたい、似合わないキザでダンディな言葉で彼女を口説き落とす、部屋を出ていく前に毎晩逢う約束をしてしまったのだ。

モット伯爵はマリアンヌ王妃との事を思い返しながら、顔が赤くなったり、青くなったりで悶えている。

だが突然、彼の腰に激痛が走った。

（グオオオオオ！！！？こ、腰が！！腰がアアアア！！！！）

どうやらマリアンヌ王妃との性交で腰を酷使したツケが回ってきたようだ。

（クッ！あの淫乱王妃め！私をこんな目にあわせおって……底なしにも程があるぞ！）

帰り際にマリアンヌ王妃にまだ物足りないのか、再び求められ、四回も相手させられ、召使いが部屋に来る前に退散し、腰に腰に何か違和感を感じながら、何とか城を抜け出したのである。

だがモット伯爵は知らない。

マリアンヌ王妃とあんな関係を持っただけで終わりではない事を…

挿話 自由を奪われた好色伯爵と新たな愛に目覚めた王妃（後書き）

次も挿話を出します。

モット伯爵からサイトです。

挿話 サイト、念願の彼女が出来る（前書き）

サイトに彼女が出来る話です。

オリキャラですが年上で美人のお姉さんです。

挿話 サイト、念願の彼女が出来る

モット伯爵の件でサイトは学院の厨房前でアルシオン達からこつてり絞られ、二度と無謀な事はしないと約束させられた。

特にルイズが心配して泣きながら怒っていた事にえらく応えたらしく、己の無鉄砲さを悟り、責めた。

サイトは心から反省し、アルシオン達に心配かけた事を謝り、もう二度とあのような無茶な事はしないと誓い、この場で解散となった。

(……………)

小屋に帰るサイトの落ち込んだ後ろ姿を心配そうに見詰める一人のメイドが見送っていた。

翌朝、厨房では学院の職員と生徒達の朝食の準備をしていた。

コック長のマルトーの指示でコックやメイドがテキパキと作業をしている中、サイトを心配していたメイドが作業中のシエスタに声をかける。

「ねえ、シエスタ……」

「はい、何ですか？ キリエさん」

キリエと言うメイドは中々の美人でシエスタより年上で背が高く、セミロングの金髪をした女性である。

使用人としてはかなり有能で真面目で面倒見がよく、シエスタのよ
うな学院のメイド達のリーダーとして彼女らを纏めている。

「シエスタ、貴女は大丈夫なの？あの伯爵の所から帰ってきたから
どうなるのかなって思って……」

どうやら昨日、モット伯爵の許から、気絶したサイトを抱えたアル
シオンと無事に学院に帰ってきたシエスタの今後の事を気にしてい
るようだ。

「ああ、その事ならもう大丈夫ですよ、実はですね……」

シエスタは今朝、学院長の秘書が使用人の寮にやって来て、モット
伯爵がシエスタを専属メイドの取り消しを通達したと言ってきたら
しく、今後も通常通り、学院で働く事になった事を説明した。

「そう、よかったわ。」

あの伯爵はいい噂を聞かないからシエスタがどうなるのかと不安だ
ったの……何の力になれなくてゴメンね……」

「キリエさん……」

「それでね、シエスタ、あのサイトって男の子なんだけど……」

「サイトさんがどうかしましたか？」

「あ、あのね……」

「？」

キリエがサイトの話をシエスタにすると、赤面しながらモジモジしている。

「コラ！キリエ！シエスタ！作業中にムダ話すんな！！」

「す、すみません！」

マルトーに怒鳴られ、二人は私語をやめ、慌てて仕事に取り掛かるのだった。

朝食が終わると、後片付けを始め、それが終わる頃にアルシオンとルイズとキュルケ、そしてサイトが朝食を食べに厨房に来て、キリエは美味しそうにシチューを食べているサイトに暖かい目、と言うか熱い視線を送っていた。

彼らが朝食を済ませ、厨房を後にすると、キリエは休憩中に何処かに行ってしまった。

森の中でアルシオンはいつも通り、鍛練をしている。

ルイズとキュルケは授業で此処に居らず、サイトは小屋で昼寝しているらしい。

彼は背後に誰かが近付いてくる気配を察知し、鍛練を中断した。

「あの……」

「オレに何か用があるのか？」

背後から女性の声がしたので、振り向くと、キリエが立っていた。

キリエはアルシオンにサイトの事を聞こうと思い、噂でトレーニングに利用していると聞き、この森に彼を訪ねてきた。

サイトの事をもっと知りたくて、彼を一番よく知っているであろうアルシオンに聞こうと思い、訪ねてきた事を話すと、アルシオンはクスッと微笑んだ。

「やはりな、君はサイトの事が好きなんだな。

君は厨房でアイツをジッと見ていたからな」

「えっ！？知ってたんですか？」

「ああ、オレだけじゃなく、ルイズとキュルケも気付いていたよ。

多分、厨房の連中も知っているだろうな」

どうやら周囲にバレバレだったようだ。

だがアルシオンはキリエにサイトの事を色々と話してあげ、くつつくアドバイスをしてあげた。

今更だが、先日、ルイズとキュルケと共にサイトの危機をアルシオンに知らせに来たメイドはこのキリエだったのだ。

アルシオンからサイトの事を聞き、アドバイスをもらったキリエは彼に礼を言って、サイトが居る小屋に向かっていった。

（よかったな、サイト。

お前に恋人が出来るなんてオレとしては嬉しいぞ。

彼女はサイトより年上だが、アイツには丁度いいかもな）

心の中でサイトを祝福したのである。

夕方になり、トレーニングを終了したアルシオンはルイズの部屋に戻ろうとすると、サイトがヨレヨレ状態でやって来た。

「ア、アルさん……」

パーカーが少し乱れ、首筋の至る所にキスマークらしき跡がついていた。

「ん？どうしたんだ？（ほう、キリエはオレのアドバイス通りに実行したな）」

知らないふりして聞いてみた。

「そ、それが……」

サイトはペタンと地に座り込み、口を開いた。

小屋でだらしなく昼寝していたサイトはドアが開いた音に気付かず、中に入ってきた女性に優しく起こされた。

起こされたサイトはその女性に見覚えがないが、シエスタの同僚のメイドで名はキリエと名乗られ、かなりの美人だったので、一瞬見惚れてしまったが、何とキリエにサイトに一目惚れしたと告白され、返事を待たずに迫られ、童貞卒業した事を話した。

童貞卒業したのはいいが、それでもキリエにせがまれ、夕方までやりまくり、半強制的に恋人にされたそうだ。

これはアルシオンのアドバイスに従ったキリエが実行した結果である。

優柔不断ではつきりしないサイトでは女性をリード出来ないから、キリエにサイトをリードしてやるようアドバイスし、襲ってよし、

無理矢理恋人にしてよしと許可したのだ。

年上で優しくて面倒見がよく、リーダーシップがあり、頼れる姉御肌のキリエと年下で頼りなく、お調子者で無鉄砲だけど、どこか放っておけない所があり、母性本能をくすぐるサイトはお似合いだろうと思ったのだろう。

「よかったじゃないか、念願の彼女が出来たんだ。もっと喜んだらどうなんだ？」

「で、でも……」

「お前には年上が丁度いい。

キリエと付き合いながら色々と学べ。それがお前の為になる」

「ハ、ハア……」

「何だ、キリエに何か不満でもあるのか？」

「い、いえ！そんな事は……ただ……」

「ただ？」

「よくわかんないんですけど、怖いと言うか、ビクビクしてるんですよ……」

「何がだ？」

「キリエさん、オレの理想通りの人だったから……」

サイトはルイズに惚れる前はキリエのような女性が理想だった事を話した。

キリエを見た時に心に凄い衝撃を受け、戸惑ってしまい、理想だった女性に愛の告白をされ、関係を持ち、恋人になったのだ。

これは夢ではないだろうかと疑いたくなったが、現実だった。

キリエを受け入れたが、未だに戸惑いがあるサイトの肩にアルシオンはポンと軽く叩いた。

「心配するな、キリエならお前をしっかりと支えてくれるだろう。だからお前も彼女を大事にしてやれ」

「アルさん……」

「フッ、でもキリエは年上だからお前は尻に敷かれそうだな」

「ア、アルさん！ からかわないで下さいよ！」

サイトは何時もの自分に戻り、アルシオンと夕食を食べに厨房に向かっていった。

その頃、キリエはマルトーから昼の業務をサボった事でお叱りを受けていた。

だがキリエの表情は幸せそうにしており、肌がツヤツヤになっていた。

挿話 サイト、念願の彼女が出来る（後書き）

次回はフーケが騒ぎ出します。

そしてタバサはアルシオンに何を頼むのか？

次は『晩年のルイズとその家族』を更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3237v/>

召喚された後の神の代行者と異世界の少年(習作)

2011年12月3日13時52分発行